1987

大正十三年一月二十九日 第三種郵便物認可
大正十五年六月一日發行（毎月一回一日發行）

永樂町人 編輯

京城雜筆

六月號

【第八十八號】

조선박람회
朝鮮博覽會
會期 大正十五年五月十三日ヨリ六月十一日マデ
會場 京城
第一、倭城台
第二、景福宮
第三、龍山
後援 朝鮮總督府・京畿道・京城府・京城商業會議所
主催 朝鮮新聞社

標準時計

時を尊重さるゝ方は正確なる時計を御持ち下さい。

正確なる時計は村木に澤山揃へてございます。

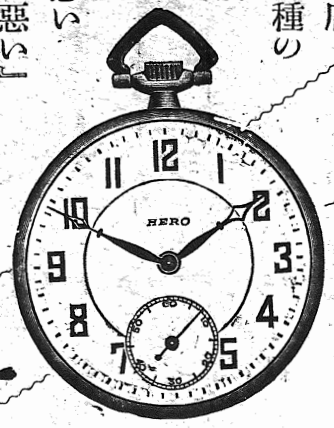
一番安く賣る店

一番品種の豐な店

『善いものは善い惡いものは惡い』

この一語既にあなたが時計を持たうと思ふ時あなたの求めらるべきもの……それが當然村木の時計でなくてはならぬことを暗示して居りません。

貴金屬



京城本町二

村木時計店

電話本局四七一・二七四　振替京城三一九〇

官製食卓鹽
電機諸機械
コンヂットチユーブ
ラヂオ
は用御の
命下御へ店幣
すま上願
京城南大門通三丁目
富田商會
長電本三三〇九

頭の先より足の先まで

と云ふ趣意にて洋裝に必要な附屬雜貨部を開設致しました、實用向から高級品迄ズット取揃へ、確かな品を極めて薄利で御便利に御提供申します、何卒『丁子屋の洋服』同樣御評判の程御願申上げます。

▲雜貨部品目

帽子、ワイシヤツ、カラー、ネクタイ、ボタン類
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首卷、ズボン
ツリ、ハンカチーフ、小供セータ、下着類

毛布新着

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙
日本毛織特製茶毛布各種、寢具用として必需品

京城南大門通り

丁子屋洋服店

電話本局 長二四六三 二二九七 三〇九〇一 番

休日無し毎日夜九時迄營業
御用の節は店内雜貨部御呼出被下度
市内は御一報次第現品持參貴覽に供し申候

◎銘仙と
毛糸◎

ろゝ姫や

堀内滿輔

電話本局
八五五番
九〇〇番
〇六五番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

六月號目次

（原稿は大體到着順に出る）

虫のゐどころ……大阪朝日新聞　下村宏氏
朝鮮を去りて……福岡市長　時實秋穗氏
偶然……總督府囑託　松田學鷗氏
ポプラの生へる處……鮮展洋畫家　遠田運雄氏
花を探ねて……總督府法務局　土居寛申氏
は……東京朝日新聞　杉村楚人冠氏
が……朝鮮鐵道　伊藤利三郎氏
咸南……總督府遞信局　高橋利三郎氏
紫煙一過……大垣丈夫氏
私の健康法……伊藤憲郎氏
札の切れ目……京城覆審法院　笠原ふみを氏
だから私は……漫畫家　小熊九万造氏
消防よりも建築……京城消防署　野崎眞三氏
この頃の事……朝鮮新聞社　市村毅氏
平南たより……燃料研究所　廣田康氏
夢……總督府醫院　木塚常三氏
隨見隨錄……紐育スダンダート　井上收氏
身邊雜筆……大阪朝日支局　角田廣司氏
藤と櫻（短歌）……京城日報社　市山盛雄氏
孤松を思ふ（短歌）……野田醬油　小水眞二氏
二人の對話……佛教慈濟會　金易次郎氏
手筋の話……東京將棋八段　松村盛潔氏
カリフオルニヤ物語……總督府　瀬戸醫院　中島長作氏
人ちがひ……辯護士　飯泉幹太氏
法律小話……伊政博氏
內地をめぐる……本町開敎院　內田竹三郎氏
淡朦錄……京城醫專　飯島滋次郎氏
一山百文……總督府鐵道局　鉅鹿曉太郎氏
話……山口均四郎氏
正一位稻荷大明神……足立丈次郎氏
刑事被告人となりし思ひ出……辯護士　今村鞆氏
伊藤公……
創作の素……京城高等商業　鈴木孫彥氏
雜草（句抄）……京城日日囑託　飯田三郎氏
如是我觀……飯田有造氏
支那生活者の死……木浦　片岡喜三郎氏
出來心……元町小學校　秋山忠三郎氏
綠蔭漫語……群山

虫の居どころ

下村海南

位階勲等辯後日物語といふほど仰山なものではないが、先月の中央公論に掲載した位階勲等辯につき、筆に舌に知ると知らざると、色々の事をいうて來る。其中の一節を特に御披露する。

× × ×

或る友が筆者の肩を叩いて曰く、

『中央公論のあなたの記事は痛快でした、實に衆人みな云はんとして未だ言ひ能はざる事でした。僕は熱烈なる忠君愛國論者であるが、以前に奈良の正倉院拜觀を願ひ出た』

『君がまだ正倉院を知らぬとは不思議千萬だネ』

『僕は藝術の方には相當趣味があるから是非見たいと思うてナ……ところが位勲が無いからと來た、我々は相當まとまつた租税を納めてる、其收入から給料を貰うてる御役人は、位勲があるといふので拜觀出來る、我々は出來ぬ。あとで吾々風情も何んとか手續をすると拜觀が出來ると聞いたが、モウ糟に觸つてネ、行かぬ事にした、少しば宮内省も考へないとナ』。

× × ×

此話を聞いて連想した事は、先月京都の府教育會の講演に出かける時、丁度比叡山にケーブルもかゝつたので、母と妻をつれて登山する事にしたが、京都の友達から電話で『登山の道すがら修學院を見物しては？』と問はれたから、『丁度願うてもない折だから是非に』と答へると、『それならフロックコートで』といふ。フロックコートの登山も困るが、其晩すぐ東京に出かけねばならぬから、ソレでは殘念ながらと斷つた。

世界の大戰前に背廣のまゝ、露都で宮城を拜觀して、亜歴山皇帝第三世崩御の居間にまで這入つた事がある、伯林でも維廉第三世の王城を拜觀した。

資格にも服裝にも、或る程度の制限はどうしても必要と思ふが、それにしても猶考慮の餘地があると思ふ、さうでなく共、多くは其時の一寸した應對の詞の端からでも、妙に感情をこぢらかす事がある、況んや虫の居どころの悪い時に於てをやである。

× × ×

モ一つ連想した事は、かつて日鮮融和に努力した鮮人某は、後に排日の亜魁となつて、とう〳〵寺内總督暗殺の陰謀を企て獄に下つた話である

警察官であつたか裁判官であつたか、本人に

『何故にお前は陰謀を企てたか寺内總督にどんな怨があるか』と尋ねたら『總督は眞面目な立派な人で何んの恨みもない、只排日の爲の手段に外ならぬ』と答へる。

【二】

『ソレなら何んで前かたには日鮮融和を唱へながら、急に排日に豹變したのか』と反問すると、

『自分は鮮人仲間の非難攻擊に甘んじて、何んとか日鮮融和の實を擧げようと忍び難きを忍び〳〵して來たが、どうしても内地人の區別的態度が變らない、總督や大官の人達はそれ程でもないが、低い人ほど吾々に對して無理解である、ある時平素交誼を重ねてゐる××局？の何某の邸を訪問した時に、名刺を通じると女中が手にして奥へ入る、そこの奥さんの聲で

『そのヨボはどんな風をしてるネ』

『奥様……いくつ位の年輩の六ケしい顔したヨボですよ』

『そんなヨボ斷つてお仕舞ひ』

いつも日鮮融和の上に理解を持つて貰うてる何某の家で、女中も女中だが奥さんまで『ヨボ〳〵』といふ『そんなヨボなら斷つておしまひ』といふ。之を耳にした私は女中の返事も待たずに飛び出した、同時に日鮮融和といふてもとても駄目だ、駄目と極ればモウ排日の外に道かない、とその時に心機が全く一轉したのですといふたさうである。

此陰謀の首魁者の名前も、其訪問した家の名も、筆者に話した人の名前も今は皆記憶がないが、朝鮮では少し調べたら分る事であらう、何れにしても此間のサイコロジーにつき、臺灣の役人をして居た自分には、強き〳〵或る印象を心の底に刻まれた事であつた。

× × ×

話は枝から枝へと移つていつたが、双方に五分五分の道理があつても、感情は必ずしも二二が四とはならぬ勝ちの世の中である。

昔から千丈の堤も蟻の穴からといふ警へがある。極めて不用意な

◇江湖見聞錄

京城雜筆

昔から千丈の堤も蟻の穴からといふ譬へがある。極めて不用意な無邪氣な詞のはしから、飛んだ重大な事件を生ぜむ事がある。もとも人で何んの性質ともいはぬ人間は感情の動物である、況んや虫の居どころ悪きに於てをやである。（一五、五、四）

鐵砲玉

東京　玉井小次郎

×

子供の時分に、鉛を鎔かして鐵砲丸を造つて遊んだことがある。山家のことだから、昔は獵をするのにも一々自宅で鐵砲丸を造つたものと見えて、私の家にも鐵砲丸の鑄型があつて、柄のついた鐵製の皿の中へ鉛のかたまりを入れて、それをよくおこつた炭火の上に載せて、根氣よく待つてゐると、鉛がだん〳〵鎔けて、たら〳〵と流れるやうになる、それを鐵砲丸の鑄型の中に流し込むと忽ち銀のやうに光る鐵砲丸が出來るのだ。簡單なことだが一の製作といふ興味がひどく私達を喜ばしたものだ。

×

火力が十分でないと鉛は却々鎔けない。で、幼い私達は黒い鼻汁を垂らしながら、唇を尖らせて火鉢の炭火をフウ〳〵と吹いたものである。鎔けない鎔けないと思つて躍氣になつて火を吹いてゐるうちに、鉛の一端がかすかに動いて、其處から徐ろに鎔け初める、片ッ方から鎔け初めると殘餘の部分はまるで其處へ吸込まれて行くやうな調子になつて忽ちトロ〳〵と鎔けて行く。

一旦、鉛が鎔けた時、更に別の鉛のかたまりを追加すると、今度は時間も要せずに直ぐ鎔けた鉛の中に鎔け込んでしまふ。

×

要するに鎔け初めるまでには時間がかゝるが、鎔け初めるとほんとに譯もなく鎔けてしまふ。私は人間と人間との感情的關係もこんなものではないかと思ふ。

◇江湖見聞錄

石川利夫

○

この頃朝鮮新聞紙上に『昌德宮十五年』といふ續き物が出てゐるが、筆者は權藤副社長、我々の知らない宮中秘事が稀に見る典雅な文章で書かれてゐる。近ごろの好讀物である。

○

いづれ單行本か何かになるのであらうが、機を見て細評を加へたいと思ふ。

○

今村螺炎氏……土佐の人である中江兆民氏先生の門下で、ずつと若い時『しのゝめ新聞』（大阪）に筆を執つてゐたことがある。シタタカ物である筈だ。

○

足立丈次郎氏を訪ふ、玄關に待つてゐると、裏から鍬を擔いだ農夫姿の人が來る。互に顏を見合せると足立さんだ。につこり笑つて『これがこの頃の私ですよ』

○

今度東拓の土地改良部の總務課長となつた渡邊得司郎氏、小氣味のいゝ人だ。『僕等は百性だがなあに百性だつて隨感隨筆はあるさ僕も時々書かせてもらふ』

○

渡邊晋博士、蓬間の踊りに行つて、抽籤で蓄音器を引きあてる。あの天眞爛漫な博士のこと『こりやウマイ』と破顏哄笑したこと眼に見るやうだ。

○

『東亞法政』主幹の飯田氏、ぶらりと來て三十餘年前の二六創刊談をやる。一寸……これ位話の上手な人は京城には少いと思ふ。

【三】

朝鮮を去りて

時實秋穂

編輯子は四月號に私の朝鮮を去るに就て何等かの挨拶があるべきを豫告せられた、親友矢鍋君は忙中閑を作つて『時を涙るの辭』を本誌に寄せられ、別に永樂町人は親しく書を寄せて、何が書かずむばあるべからずと要請せられる、勿論多年の交誼に對し、催促を受ける迄もなく御挨拶はせねばならぬことなので、乍延引鳥渡御免を蒙ることとする。

思へば大正八年九月のことである、齋藤總督が新に總督の印綬を帶びて朝鮮に渡られて後間もなく尙內部の陣容を新にする爲め人事の異動が行はれるであらう、地方長官にも異動があるとの噂が傳へられた。其の時妙に朝鮮へ行つて見たい氣分になつて、知事なら行くがナと戯言の樣に云ふたことがあつた。暫くして九月十三日頃であつた、夕方食卓に向つて晩酌を傾けて居つた所へ電報が届いた、朝鮮總督府政務總監からである。ソレ來たぞと思ふて開いて見ると貴下を道知事に推薦したし、國家の爲め奮つて御承諾を乞ふと云ふのである。電報一本で何處の果へでも行く覺悟で振出した役人生活殊には恩顧を受けた先輩の推擧であり、不思議にも興味を有つ樣になつた朝鮮のことなので、決心は早かつた。翌朝一應知事の意見を伺ふて、直ぐ宜敷賴む旨の返電を發した、之が私の朝鮮と特別の緣故を有つ樣になつた抑々の初まりである。

赴任は出來る丈早くと云ふことで、二十六日の發令で二十八日に出發し、三十日の夜連絡船に乘り十月一日には早くも京城の人となつた。連絡船の中や釜山上陸後の汽車中での感は、云ひ知れぬ深い興味の湧くのを覺へたと共に、將來に對して彼是と止め度もない胸の動きを禁ずることが出來なむだ嫁入つて行く處女の樣に、不安もあるが同時に希望に燃えて居つた又一面戀に成功したかの樣な誇も勿論交つて居た。十月一日は云ふ迄もなく始政紀念日である、而かも騷擾後第一の且は一ヶ月前に南大門驛頭で爆彈さへ飛むだ直後の記念日である、後から聞けば物騷な閉店騷ぎさへあつたと云ふ事である。まだ夜も淺かつたに拘らず町は淋しかつた、友人が久し振であるから何處かへ晩飯を食ひに行かうと云ふたが、今日丈は遠慮したがよからうと云つて引留めた。こむなことは實は私としては稀有のことなのである。明日から愈朝鮮統治の重責を負ふて働くのかと考へると、多少の感慨なきを得なむだが、幸に朝鮮に於ける第一夜の夢は極めて圓かであつた。

朝鮮に於ける私の生活は足掛け八年、滿六年半であつた。就中京

【四】

城には滿五年居た、滿五年腰を据えて居つた所は餓鬼時代の鄕里は別として、中學校時代を過した岡山と我京城丈である、學生時代を除外すれば、京城の外にはないことになる。在鮮六年有半、私は終始愉快な生活をした、公私共惠まれた生活であつたと思ふ。初めの內は地方もまだ充分安定と云ふ譯に行かず、色々無氣味な報告などあつて、頭を苦めたこともあるがそれも追々と安定を見、周圍の人々からは常に非常な好意を以て迎へられて、何不滿なく過すことが出來た。職務上のことなど云はぬが花であらう、考へて見れば恥しいことばかりである。忠淸南道へ著任して間もなく、郡守會議で一場の訓示をした、之を見た或朝鮮人の批評に、初めて朝鮮に來た知事としては、凡ての方面によく調査が行届いて立派な訓示である、只聊か物足らぬのは、精神の糧とも云ふべき宗敎のことに一言も言及してないことであると云ふのがあつた。朝鮮の一般民衆の荒むだ精神を開拓する爲めに、宗敎心の涵養が必要であることは云ふ迄もない、論者の言には勿論異存はないが、此の問題の解決は前途尙遙遠と見ねばなるまい。最近四月號の朝鮮公論を手にした。社長石森氏から特に七十一頁『農村の一朝鮮人より』を讀むで呉れとの手紙が來た。之によれば、私が大正十二年京畿道知事として赴任の初頭郡守會議の席上でした訓示に感じて養蠶業に志し、今や桑苗自給の計畫其の他著々歩を進めつつあると云ふのである、此の篤志家のあることと、私のつまらぬ業蹟の中にも、時に斯樣な反響があつたこととを知る機會を與へられた石森

君の好意を特に感謝すると共に、之等から推して、六年半の私の

京城雜筆

君の好意を特に感謝すると共に、之等から推して、六年半の私のつまらぬ仕事の中にも、多少は朝鮮の爲め國家全體の爲めになつた事があつたかと幾分心慰む譯である

六年有半の朝鮮生活五年の京城生活、舞臺の餘り廣くない朝鮮の官界では短いとは云へぬ、見方によつては行詰つて居つたかも知れぬ。然し私としては未だ朝鮮を去らうとも去らねばならぬとも思ふて居らなむだ（鈍感の爲めかも知れぬが）、二月十日頃の一夜、友人を招いて晩餐を共にして居つた福岡縣知事である先輩柴田善三郎氏から長文の電報が來た、家族の者が鳥渡と別室へ呼むで之を見せた、電文の冒頭に貴下を福岡市長に推薦したし云々とある、後を讀むは隙がかかる、要領は分つたよし〳〵と後は見ずに元の席へ戻つて、友人と飲み續けた、友人が歸つてから電文の全部を讀むだ。市の事情其の他大體の經緯は分つた何らしたものかと考へた、第一は上司の御意圖如何であるが、然し上司にしても下僚の將來に對して保險を付ける譯には行くまい、それが本人の前途にどむな影響を來すかも計り難い、一應の意圖を伺ふことは下僚としての禮であるが結局は自分で決めねばならぬ。柴田知事は都合で自分が出掛けると云ふて居られる、總督にも依頼してあると云ふ、何うも結局口說落されるのではなからうか。尙色々神秘的に此の度推薦せられた地位を承諾する事が、私の宿世の約束であるかの樣に考へられる事實もあり、一面行詰つて居ると云はれる後進の進路を開く事も、無駄事ではあるまいと思はれたので、上司の御意嚮も一應承つた上で、之も割合速に決心した、勿論之が爲め私の將來が如何になるかは分らぬ、只頼む所は過去十九年の官界生活に於て、私に多大の恩惠を降された天か神かは、相變らず必ずや同じ恩惠を降されるであらうと云ふ信念と、從來と同樣正しい道を進むで行くならば、自分の有つて居る力丈は何時かは表はれるに違ひないと云ふ確信との外ない。斯樣な考から所謂素裸で、全然緣故のない土地に全く新しい生涯に入ることにした。或は之が爲めに先輩の恩顧に背いた點があつたかも知れず、親しい友人の期待を裏切つたこともあるかも知れぬ、がそれは今後新らしい生活に對する努力によつて償いたいものと思ふて居る。

京城を立つたのは三月十八日である、順次久しく住み馴れた朝鮮の土地に別れを告げ、最後に六年半前初めて渡つた玄界を又渡つたなつた朝鮮に於ける私の生活は足掛け八年、滿六年半であつた。就中京早かつた。翌朝一應知事の意見を伺ふて、直ぐ宜敷頼む旨の返電を

朝鮮に於ける私の生活は足掛け八年、滿六年半であつた。就中京城の生活は、時に斯樣な反響があつたことを知る機會を與へられた石森流石に感慨無量なものがあつた、釜山を出帆すると鳥渡風があるので浪もかなり高く、船が動搖し初めたので、船室へ入つて寢に就いたが、永い間に先輩同僚知己から受けた厚誼や其の間に際會した色々の事など思ひ出して、暫らくは寢られなむだ、然し連日の疲れに何時とはなしに寢てしまつた。目の覺めたときははや下の關間近である、二時間餘りの内に新らしい生涯の舞臺に入るのかと思ふと、又新らしい感慨に打たれる、勿論淋しい感もしたが、一面希望の前途に横るのを感ぜざるを得なむだ。さて今後が愈何うあらうか、之は只運命の神のみが知つて居られることと思ふ、親しき誌友各位、何うか海の彼方に舊き友のあることを忘れ給ふな、而して相變らぬ同情と援助とを與へられむことを希望して已みませぬ。

（一五、五、七）

旅

順川　寺田鐵五郎

瀬戸の海みつる夜潮の渦卷に筑紫の町の
灯はくだけゐる（下關より門司を望む）

ほのぼのと白く鷺ゆる白鷺の城いつかし
くゆふ闇に見ゆ（白鷺城）

さゞ波や滋賀の琵琶湖の朝の風ぎとゞま
る汽車を降りてわが見し（大津驛にて）

靄こめし島のふもとに屯して灯かげ見ゆ
るは家かも多き（淡路島遠望）

たゝなづく八十群ら山は陽は照れど霧ら
ひは霽れぬ富士の高嶺ろ（御殿場驛）

街なみの軒した暮れつ露店の灯のあかる
むなべに往き來繁しも（牛込神樂坂）

自動車は過ぎて遠けどこれの街路砂煙を
揚げてまだおさまらず（東京市街）

樟の樹の日かげを多みこの森の夏の茶店
は涼しくあらむ（京都下加茂紀の森）

偶然

松田學鷗

◇去る三月の初より末にかけて內地へ旅行した。此の旅行には偶然の事が多かつた。

◇先づ第一に佐賀に往つた、こゝでは、壬辰の役に鍋島侯の祖先加賀守直茂に連れられて、朝鮮より行きし齡十二の可憐の少年、姓は洪、名は浩然、後に雲海と號し、直茂の世嗣、信濃守勝茂に殉死したる烈士の事蹟を調べる爲めであつた。浩然の血統は五世にして絕えたが、其の後を繼いだのは古賀精里の二子煒であつた、其の子孫なる洪氏は今に榮えてゐる、予が調査資料を得んとして唯一の賴みとしたる、佐賀圖書館長は、其の洪氏より出でし人ならんとは、實に偶然であつた。

◇山口に往いては大內氏の朝鮮關係を調ぶるのが主であつた併し豫期に反して得る所なく、却つて思ひ掛けなくも、故朝鮮總督寺內伯の紀念文庫があつたので、こゝで得る所多かりしは偶然である。寺內さんを武斷政治家と誹譏する人もあるが、此の文庫は圖書館を兼ねたもので文敎を資する多大なるものたるを知つた。

◇東京に於ては、元朝鮮臨時土地調査局の同僚三十名一堂に會して、予が爲めに歡迎の宴を開いてくれられた、これ眞に偶然である。隨分土地調査局の高官であつた人の東京へ出入りも多いとのことであるが、こんな會合は遂に無かつたと云ふ。

◇日光では東照宮の朝鮮鐘、大猷廟の朝鮮燈籠に就て、多年予が研究せし事實に對照した、李朝實錄や文獻備考などいふものの薩張り證據にならぬことが愈々判かり、予が研究の殆んど的中せるを知り得たるも亦偶然と言はざるを得ぬ。

◇足利に近き富田村の字西場なる雲龍寺に、林羅山の高弟たりし人見鶴山の墓を弔つた、鶴山は天和年間の朝鮮信使と大關係ある人である。同寺には豐後日出城主木下俊長の書ける鶴山の像があり、又佐賀鍋島氏の五代綱茂の書ける詩箋三十餘葉もあつた。共に鶴山の門弟たりし人である。斯る筆蹟を此の山寺にて見る、全くこれは偶然であつた。

◇逗子に前きの李王職次官小宮刀水翁を訪ねた、歡び迎へて示されたる珍貴の書畫中に、甘雨初來霑萬人（春畝）。咸寧殿上靈華新（塊南）。扶桑槿域何論態（西湖）。兩地一家天下春（一堂）の聯作の詩箋を藏し居られ、これに李太主、嚴妃が親筆をも添へて翁に贈與ありしを見て、實に其の偶然に驚いた。

◇岐阜に於て七寸も積りし雪に遇つたのも偶然である。それに親知に伴はれ岐阜より五里の電車に乘り美濃町に至る途上、車中より古刹として名高き龍泰寺を眺めたのも亦た偶然だ。此龍泰寺の住職五十嵐絕聖老師は乃ち京城賈溪寺の住職をも兼ねられて朝鮮布敎に盡瘁せらるゝは予が言ふまでもない事である

◇まづ此の位にして、雜筆社より偶然寄稿を促されたる責めを塡めしまでゝある。

◈丸ビル珍話

平田久雄

仁川の名物男穀物協會の大平さん、この春東上して、丸ビル殖銀支店に、守屋三藥氏を訪ふ▲イヨーと一流の調子で、ヌツト這入ると『Oさん、髯を剃らうや……』剃つて來ると『Oさんその野暮なネクタイをどうかしなさい……』買つて來ると『ワイシャツが氣になるね、それで東京の町を歩く氣かね……』▲丁度三度お使ひに行つて『ウヽこれでハイカラになつたらう』と欣々と戻ると『どう見ても都人士ぢやない、けれどこの上は外科の領分、そこで話は……』に、Oさんカン〳〵になつて『ヤイ〳〵この薄情者め、俺はまた親切でいふのかと喜んでゐると……』ゴツン〴〵〴〵（Oさんヤケに卓を叩く）

かち適當の肥料が必要である。それは材能に刺激と養分を與へてや

ポプラの生へる所

遠田運雄

兎角問題に成る鮮展も最初の盡の姿でもう五年もやつて來た。

何と言つても矢張り日本は官設仕事と成れば一も二も無い譯の無さ、近來京城に洋畫家の多い事は驚く可きもので正に鮮展の影響と見るべきである。

毎年其進境に目ざましいものがあると言はれてゐるが果して言葉の通りに進歩してゐるものであらうか。

テーヌの說に從へば凡そ藝術所產の周圍には精神的氣溫が必要であると言ふ、材能を種子に比べたならば其成長の爲には植物に於ける氣溫と同樣のものが必要である

第一に土がそれに適してゐるか否かを考へねばなるまい、次に又溫度が才能の種類を選擇する。例へば朝鮮へ初めて來た人は誰れしも感ずる如くに、こゝでは我等の故鄉に於て親んだ樹々の繁殖率が少いのに、ポプラがやたらに繁茂する。

吾が鮮展とそれを取り巡く周圍は、單に畫家をして專ら畫作の生活を許してゐるかどうかと言ふならば、先づ多くの畫家は他に職業を持つ人である。生活力の大部分を他の仕事に依つて費さなければ其餘技的の畫作をつゞけられないといふ狀態である。

クルベエの如き精力絕倫の畫家が言つた——最も强健なる男子が一生の努力をかたむけても研究し盡されぬものは藝術であると。

この言葉に對して何と徑庭のある事であらう、曾て私の先輩である朝鮮出身の畫家があつた、目覺ましい努力の應酬として文展特選をかち得た、そして光榮につゝまれて家に歸つたが其人の畫家的生活は忽ち萎縮してしまつた、朝鮮の生活には藝術は沒交涉であるからであつた。まだ〳〵斯ふいふ例は少く無からうと思ふ。

種子が土に根を卸した時、それから適當の肥料が必要である。それは材能に刺激と養分を與へてやることであらう。展覽會前に成つて彼等を持ち上げたり天下の畫伯にすることでも無ければ、美名にかくれて自己宣傳をやらせる事は決して材能の萠芽に力を與へるものでは無い。嚴正なる批判こそ望ましいものである。

萠芽の向日性の如くよりよきものに對する彼等の憧憬にたよりを與へてやる可きであらう。

お上の威勢を以てしてもつと有意義な參考品を出陳することは强ち面倒な事では無からうと思ふ。

斯うして考へて見ると、朝鮮には美果の無いポプラが繁殖するのも緣の無いことで無い。朝鮮人がモヤシを食物にする樣に、日影の瘠地にせつかく落した萠芽をムザ〳〵と食べられる樣で慘酷である

（四月二十一日）

◈三先輩の話

石川利夫

◎今本君の寄稿を、引きつゞき讀んでゐるが、實にウマイもんぢやネ、君は知るまいがアレは大したお家柄の兒ぢやョ。世が世なら町醫者などする人ぢやないんだが

◎僕等擔板會の一味が、例の方洛先生を招待し、今夜まづいところを見て貰ふんだ。どういふかネどういふ辭令で活殺されるか、これから耳をほぢつて、出かけやうと思ふ。

◎寺尾さんが、しばらく書かんネ、ナニ忙しいッて、忙しくない人間が當世にあるかね、そんなことは理由にならぬ。やかましく學館主人をせめろ〳〵（以上工藤武城さん）

◎細井肇君と、將棋をやるが、どうも相手が手荒いので困る、たちまち僕の壘を押破つて、王手々々と來るのでウルサイ。

◎一體僕は將棋をやると、第一『角』をどこへ逃げやうかに苦心する。なぜといふとアノ先生（角）は、正面にキカないので、一向たよりにならぬ。しかもスグあの筋から破れて來る。僕はむしろわが角將の存在を咀はさるを得ない……（以上、靑柳南冥さん）

◎平南順川警察に寺田鐵五郎といふスパラしく書ける男がゐる。警視か、警部か、巡査か、何か知らんがタイしたものだ。僕は近ごろコンナ妙文を讀んだことはないョ（以上今村鞆さん）

【ヒ】

花を探ねて

土居寛申

△今春二月下旬宮崎へ六年振り旅行をした、吉例とあつて著宮第一に神武天皇を奉祀せる宮崎神宮へ參詣した、一の鳥居前で下乘、早速目につくのは境内老杉鬱蒼たる邊り低く棚引く一抹の霞、此ぞ名物の元日櫻、今を盛りの滿開振り、雪の國から出かけた私は流石に驚いた、花も樹も吉野櫻に似て梅と一しよに咲く珍らしい櫻。

△久し振りで日向女に一寸注目した、隼人人種と熊襲人種と天孫人種との三タイプは依然として存在して居つて、六年前より別に美人が多くも少くもなつては居ないが以前より何となく美しく見える、此は不思議とよく注意して見ると、髮と顏、衣類の著こなしと柄模様、下駄と洋傘等以前に比して非常に調和のとれて來て居ることに氣がついた、歩き方に尙氣に喰はぬ點はあつたが、兎に角婦女美の向上に可なり進歩のあつたことは事實である。

△三月上旬大分縣の東海岸を一巡した、流石は梅の國である、花といひ香といひ他に類を見ない、野に山に庭園に彼の高雅な梅の姿を見るとき俗腸は一洗せらるゝ心地、文人雅客が古來多數輩出したのも尤もだと思ふ。

△女については別に著しい變化を認めぬ、相變らず飾りのない純なる點が見えるとは丁度野梅其ものを見る樣であつた。

△四月上旬東京の櫻を訪うた、本年は氣溫不順の關係か花つきが誠に悪い、殊に花の色が殆ど白色に近い程褪せて居る、況してあの雜沓を見せつけられては到底花見る氣分になれぬ、昔東都に居つた時信じて居た程よい都とは思はれなくなつた、去つて都外武藏野の花を尋ねて見たが、矢張色が悪いので少なからず失望した。

△私の一番好きな東都の女の姿に對して今度位悪感を持つたことはない、一般的とはいはぬが、又日本髮の復興がないでもないが、猫も杓子も例の耳かくしといふ髮を結つて、それが顏に似合ふまいが、全體の姿と調和しまいが、一向お構ひないといふ見苦しいお姿を拜見して非常に悲觀した、今春街の夕まぐれ御神燈くゞる婀娜姿に昔ながらの水髮を見つけて僅に瘤飲を下げたのが切めてもの淋しい慰め。

△四月中旬甲府の櫻を尋ねた、流石に山國の花は其れらしい趣がある、御嶽昇仙峽に遊んで長い間東都で吸うた塵を殘らず吐き出した樣な心地がした、信玄公古館を訪うて思はず戰國時代の昔を追懷した、落花の特に多いあたりが、勝頼、八重垣姫イチヤツキの跡であらう。

△甲府の女の白粉の濃いには一驚した、美人の肌もこれでは臺なしである、遂に女なるものを見ず白粉を見たのみだ。

△甲府から長野に向つた、諏訪附近の山々は殘雪尙深く、日本アルプスの連山は多其儘である、木の芽も出ない花も蕾、四方の光景何となく朝鮮の樣であるのもなつかしかつた、然し花嶽の往來繁く世は流石に春であるとうなづかれた、姨捨川中島は雨に霞みてよくは見えず、沿道杏の花の滿開に旅情を慰めながら長野に下車雨中善光寺に詣で夜行で中仙道を下り寢覺の床も闇の中に見送り一路京都へ向つた。

△長野で出會ふ女は多くは他國人の善光寺參り判斷の限りにあらず。

△京都では第一に御室の櫻を訪うたがまだ早かつた、清水の櫻は大部分散つてもの足らぬ、鳥部山にお俊傳兵衞の墓を弔つて嵐山に向へば是れはしたり日本一の花の名所に花がない、葉櫻をといひたいがまだ花が散つたばかりで葉も十分伸びて居ない、楓の新芽も今出た許りで何

ハガキ

杉村楚人冠

平生お目にかゝる機會がとんと御座いませんので、つい〳〵御疎遠になつてしまつて、申譯がございません。

新しい友人の出來にくい私共の年配になりましては、知らず〳〵のかけちがひから、一たび御懇意に願つた方にも、いつしか忘れられて行くといふほど、心細いことはありません。

一つには、たとひこんなに御むさた致して居りましても、私の方で決して忘れて居りませんことを申上げたい爲に、又一つにはどうか貴方の方でもお忘れ下さらぬやうお願ひ申したい爲にこゝにこのハガキを差し上げて御機嫌を伺ひます。

さし上げるのは、たゞ一枚のハガキですが、この一枚に私の心のこもつてゐる事をおくみ取り下さるやうお願ひ申上げます。

大正××年×月××日

千葉縣我孫子　杉村廣太郎

私は相かはらずこの我孫子から東京朝日新聞に通勤して居ります。母も妻も極めて無事、四男は名古屋の學校に、五男は嘉屋中學の宿舍に、六男は宅に、それ〴〵達者に暮して居ります。

の風情もない、花も紅葉もない嵐山は誠に平凡なもの、小督局の墓の邊に坐して煙草を吸うた

△京の女は深窓に隱れて出歩く女は他國のものが多い、立入つて批評の出來ぬが殘念、然し七三の髮は多いが耳かくしの少いのが却てサツパりした。

△四月下旬に姫路の櫻を訪うた、有名なる白鷺城の追手前の櫻は見事に咲いて居つた、只附近で博覽會があるので何となく騷々しく俗化して居るのが殘念であつた、城内一巡播州皿屋敷で有名なお菊の井戸があるが、勿論場所が間違つて居る、去つて鷲雲寺にお夏清十郎の墓を弔うた。

△姫路には美人が多いと思うた、然し甲府同樣白粉の濃いのが遺憾、顔に血の氣がなく丸で象牙の面、表情の發現を殺して迄白粉を塗るのは、問題ではあるまいか。

△京城に臨つて見ると櫻が滿開。

△鮮女の楚々たる姿を見て汽車の醉も治つた

（四月末日）

雜詠

仁川　吉岡久

李王殿下薨去を悼む

歸雁遠く弔旗夕風にゆれゐたり

在仁二十年茂木和三郎君の東京に去るを送る（記念撮影）

君も立てり我も立てり木の芽團みつゝ

讀書會の送別の夜

話盡くさず去る君に櫻月夜かな

我が幼き兒の入院して

起すものなく木の芽の雨に寢過ごせり

退院せる日玩具を與へて

痩せし手をとり赤き風車をもたせけり

咸南

伊藤利三郎

つと出來上つた計りで、未だ木の香も失せず漸く書堂に昔日の面影を留むるに過ぎない。

背面の山貌必ずしも悪くはなく以前は樹木等も鬱蒼として鉛川の水も奇麗に、嘸かし幽邃の趣掬すべきものがあつたであらうに、今は所々に畑などが出來、燒跡も今に其儘になつて居つて新舊建物の調和の取れて居ないこと等、心なき山守の仕業と見えて一山の光景雜然として折角の新殿堂も壯嚴の氣に缺げて何となく安つぽい感じがする。

○

咸興より西湖津に行く途中一里計りの所に本宮と云ふがある。李朝太祖の舊邸と稱せられ太祖以下四祖の位碑を祀り又其遺物を藏して居る。中庭に太祖弓懸の松とて凡そ五百年を經たと記錄した異形の大木がある。

案内を乞ふて本堂へ廻ると黄白の僧衣を纏つた堂守が丞しく招して、所謂太祖の使つたと云ふ裝束や弓箭の類を見せて呉れたが、遺憾なことには何等感興を引かなかつた。周圍をコンクリート塀で大きく廻らした内に十數棟の大小建物が散在し、本堂の前面には神樂堂の樣なものがあり、其横に小さい池があつて其間に大小の樹木がポツ〳〵生へて居ると云へば相當景色が整ふて居る樣に思はれるけれども、夫等の配置に情味なく又例により手入掃除等行き届かず何となく物足らぬ心地がする。

毎年春秋二回の御祭の日には遠近より信者が集つて相當繁昌をするとの事である。

○

西湖津は咸興を南に三里計り離れて居る。日本海に面した一小港

京城雜筆

○

天來の福音たる產米增殖計畫も愈々今歲から實行さるる樣になつて來たので、今迄沈滯し切つて居た朝鮮も此處一時に春が來た樣な心地がする。

○

同じ半島でも北鮮は今迄北海道や樺太程にも顧みられなかつたのに、今度咸南の山奥に十六萬五千キロワットと云ふ、東洋にも無い一大水電會社が出現することになつて異常の衝動を與へ、忽ち世間の視聽を惹く樣になつて來た。

○

朝鮮鐵道では現在の營業線咸興より長豐迄十七哩七分の處へ更に約二十哩の工事をなしつゝあり。水電會社でも專用鐵道十三哩の工事を起し、更に近く貯水池の築造を始めんとし、又政府でも現に城川江の改修を行つて居る等、六七月頃工事の盛りとなれば赴戰鎭から城川江へ掛けては逐々無慮萬に近い勞働者が入り込んで來るので今迄の靜寂無比な此小天地は忽ち修羅八巷の地域と化するであらう

○

今迄北鮮殊に中間の一僻村とのみ思はれた新興なる一小邑には、早くも宿屋が建つやら料理屋が出來るやら低級なカッフェー、料理店等も增へて來て、豫定通り魔性の出沒を見るに至つては如何に內鮮人往來の頻繁なるかを窺ひ知ることが出來やう。

○

咸興を距る東北一里計りの處に帝和陵と云ふて李朝桓祖と懿妃を祀つた陵がある。三方を山で廻らした一帶の松林で、流石に靜寂閑雅の趣がある。地域も恐らく十數萬坪以上と思はれ、墓陵にしては惜しい程の廣さである。馬蹄形になつて居る地域の奥に立派な拜殿があり其後ろに一大土饅頭が南面して築かれ、其上に更に前後二つの小土饅頭があつて、周圍には例により石の人形や獸身などが適當に配置されてある。

霞棚引く遠山、其麓を廻らす布を敷いた樣な川原など、土饅頭の上より林間を通じて眺むる景色は恰もパノラマの感がある。

將來咸興が發展して所謂大咸興を形作る時、此の神域の如きも逐々咸興公園とでも爲つて盛んな都人士遊覽の地となるであらう。

○

其處より更に東北へ半道計り行くと、だら〳〵坂の山に入り道極まつた處に鶴州寺と云ふがある。李朝太祖の建立で北鮮に於ける禪宗の大本山と云はれ、有名な千佛山よりも格式が上であるとの事であるが、惜いことには舊堂宇は前年火災に罹つて大部分烏有に歸したものゝ如く本堂、庫裏等最近や

であるが、豫て新聞紙上に水電會社が肥料工場を此地に設けるとか

京城雜筆

であるが、豫て新聞紙上に水電會社が肥料工場を此地に設けるとか云はれた所である。後學の爲に行つて見ると案外にも宿屋が漸く一軒しかなく、相當な漁場でありながら本當の意味の料理屋すらもない樣な憐れむべき寒村である。實は漁りたての肴で一杯やらうと、態々晝飯を拔きに出掛けた所が豈に計らんやの始末で大當外れの大骨りであつた。

港も西は開放し吹暴しの儘であるから今日の處果してどれ程金を投じたならば、此港が北鮮唯一の良港と稱せらるゝ元山に對抗し得る樣な價値あるものとなるであらうか。相當考究を要する問題ではないかと思はれる。

入江の中央は一部淺淺で夏になれば海水浴も出來るとの事であり咸興地方に於て食膳に上る鮮魚類は軍に此の附近で獲れたものであるとの事であるから、西湖津今日の價値は或は其程度のものであるまいかと思はれた。

○

赴戰嶺上の貯氷池は大正二十年頃には完成するとの事であるから其の時になると周圍三十六里と云ふ琵琶湖の半分位の一大湖水が、海拔三千尺からの高い地點に出現する譯で、元山の海水浴場に比して少し距離は遠いが夏の避暑地としては恐らく箱根の芦の湖以上であらうと思はれる。

赴戰嶺上高山植物の草花が妍嬋を競ふの時ヨットやボートのレースなどが行はれ、茫漠たる高原に幾萬頭の牛や羊の群が逍遙し、墨堤ならぬ堰堤に櫻の馬場が出來て競馬などが催さるるとしたならば當に咸南の天地は東洋の一大樂園と化するであらう。

西湖津は咸興を南に三里計り離れて居る。日本海に面した一小港

年火災に罹つて大部分烏有に歸したものゝ如く本堂、庫裏等最近や

店等も增へて來て、豫定通り魔性の出沒を見るに至つては如何に內

歌の鮮朝

東京　福原俊丸

八道に今し春來ぬ草を木をよみかえらせし大みいつはも（朝鮮神宮）

官妓らが通ひし廊のかたすみに吹きよせられし眞紅のおち葉（景福宮）

陽の光病む眼にいたしばらくを目ふさぎ居れど樂し春の日

殖林のつゞく松原背のびして春日にむかひみどりのばすも

石ころのちらばる岡にたつポプラどれの稍も芽ふきのつよさ

殖林ののびなむ山と山の間に麥畑つづく春日もさたに

新はりの神山めぐりさく花のかけつむ道のなぞえのかろき

鐵道も永き春日につくらずば生きものゝ長蜘蛛にかも劣る

◇菩薩峠作者

石川利夫

◎中里介山君といふと、今現に大毎に『大菩薩峠』を書き、空前の評判を取つてゐる人である。

◎が、二十年前を顧みると、一介無名の田舍書生、東京へ出て來て、學資もなく、面倒を見てくれる先輩もなく、おまけに妹さんを抱へて、途方にくれたものであつた。

◎それをフトした緣故から世話したのが山縣悌三郎氏、介山君を文庫（當時の青年文學雜誌）の方に使ひ、また妹さんをば宅の女中に使つた。星霜こゝに二十年、介山果して吳下の舊阿蒙でなく、今や大衆作家として、馬琴以後の隨一人にといはるゝやうになつた。

◎最近山縣氏へ寄せた氏の近信を見ると、介山君の舊恩を忘れぬ美しい情操と、その作家生活がよくあらはれて愉快である。

（前略）先生のお世話を蒙つたのは私の二十歲前後の時でございましたが、私も今では四十二の厄年とまでなりました。それでも自分では少しも年とつたとは思はないで居ります。

兎も角も、生活だけは安定致したやうですけれども、何かと修養を致したくてまだ妻帶も致しません有樣でございます。

三年ほど武州高尾山に住居致しましたが、この程は武州御嶽山の下の山中に庵を構へ、東京と往來を致して居ります。

妹の『けい』もあれから橫濱の然るべき所へ緣づきましたが、夫が死に、子供一人をつれて震災以後は當地で母と共に小さな店を出させて居ります（下略）

【一一】

紫煙一過

高橋利三郎

ありあまる女

這回歐州大戰の結果、可婚年齡に在る壯年の男子は夥しく戰場の露と消えた。今や主要交戰國內では、女子の結婚難が著しく高まつてゐる。何しろ相手が不足なのだ然るに一度結婚生活の味をしめた者で今回寡婦となつた向は、夫の死亡に因り多少なり遺產を享けた者が少くない。そこで金のある女は無い女より相手を見つけ易いと云ふ經濟學の大原則から致して、再婚者は初婚の者よりも賣行き良好と云ふ公定相場が出來上つてしまつた。

非道い目に遭ふたのは初婚のうち若い乙女達、『一度結婚したる向は再婚を遠慮すべし』、頻りに宣傳し廻はつてるが効き目は殆どない。當分歐州各國ではオールドミス生產過剩で近くダンピングがあると云ふ。

水泳ぎと裸體

裸體で水泳ぎは野蠻人と貶なされるが、北歐瑞典に行くと、泳ぎは男女共裸に限ると云ふ。蓋し水中に在りて尤も活動便宜なる形態は完全なる裸體を以て最高の理想とするは實驗體育學の公理なそふな。事物自然の道理に反する者は亡ぶ。

印度の話一つ

アジアの太平洋に接する處は人口頗る稠密で、貧乏問題最も深酷な地方である。印度に於て一層甚しい。此の地は工業未だ興らず、農業とて原始的の幼稚な耕作法に滿足し、住民は宿命觀に甘むじてゐるので、何日になつも餓に泣く大衆跡を絕たない。唯年中寒氣に苦しむ事なく、太陽の惠みを十二分に受られるのは、貧乏人共にせめてもの悅びである。

農務省の當局者はしきりに活動して、選種、耕耘、肥培法・傳へて已まざるものあるが、結果は依然として擧らない。蓋し科學的研究の結果を普及せむには、先づ印度人の迷信、偏見、時には彼等の命より大切にする、宗敎々義を破壞せずば爲し能はぬものが多いからである。政府はペスト病でも、太陽の猛熱でも、敢て防ぎ切れる事を實地證明し、又宣傳してゐるのだが、大衆は依然、我不關である。收穫の不良は播種の日の星まはりが惡かつたせいと心得、病氣に抵抗する手段を採れば、惡靈共から恐しい復仇を受けると盲信してる。

さて貧困に因る諸惡の中、最も甚しきは負債の問題である。凶年に出會ふ等の爲め、一度金貸の手にかゝれば、彼等は終生否子々孫々に至るまで、負いきれぬ負擔に惱まなければならぬ。卽ち貸金の利率は年七割五分乃至五割と云ふのが普通だから、瞬く間に太つてゆく。しかも金貸は皮を剝ぎ、肉を削つても、利息を收めねばやまぬから、印度では今日父親又は祖父等の遺した借金の爲、奴隷の階級に陷つてる者正に無量五千萬人に達する有樣だ。

【一二】

此の憐れむべき狀態を救はむが爲めに、生れ出たのは實に金融組合である。政府の有權的報告書にも『都市と田舍地方とを問はず、印度人勞働者の生活改善に、最有力、最効果あるは金融組合の施設なり』と明言してゐる。されば政府當局者は勿論の事、公共心に富める一般仁人君子、基督敎までが皆相携へて金融組合の完成に骨折つてゐる。

然し乍ら基督敎會が專心金融組合運動を援助する事については間々非難する者がある。宗敎家の目的は靈の救濟を中心とし福音を說き、禱りを捧げるに盡きてるではないか、金融組合運動の如き事は敎會の關與するを屑しとせざる處であると。然し基督敎會は答へて曰く『靈を救ふには、先づ肉を助けなくてはならぬ』。

◇金剛山案內

吉田莊一

龜屋から『金剛山探勝案內』といふ小冊子を發行してゐる。氣の利いた案內記で、金剛山に遊ぶものゝ、その道しるべとして、是非一本を携へる必要があらう。どうしてあんな怪奇な山峰が生成したかといふことに筆を起し、短小な時間で最も都合よく見ることを說いてゐる▲著者は加藤松林氏、叙述最も懇切、その裝幀から挿繪、地圖、カットまで、悉く氏の執筆。

印度の話一つ

アジアの太平洋に接する處は人

利率は年七割五分乃至五割と云ふ　最も惡辣　その製帽方法は指紋　圖、カットまで、悉く氏の執筆。のが普通だから、瞬く間に太つて

私の健康法

大垣丈夫

私は深い學問はない、併し少々宛つは何でも知つて居るから先づ云へば八百屋の店で、品物は色々あつて小賣には頗る重寶であるが、併し問屋でないから卸賣は出來ない、從つて高遠な理想や學理は到底說明が出來ぬ。唯少年時代に物理學と生理學の相違ある點を覺知して欣然實行して今日の健康體を得たる體驗を話してお若い方々にお勸めする。

私は八ヶ月で生れ、三歲までは步行も不充分な弱虫で、生長覺束ないと父母が心配したと云ふことである、それが十六歲の時偶然にも物理學の講義で固形體と固形體を磨擦すれば漸次磨滅する。假令へ流動物でも千年萬年同一場所に落つれば、雨滴石を穿つの語ある杯と聞きたるに、生理學では然らず。固形體で磨擦すれは其處は外物に抵抗して境遇に適應する。例せば足の裏の皮は厚い。猿の尻は堅い。大工や木挽の腕は强い。顏の皮は寒くない。關取の身體は境遇に適應して偉大になる。何でも使へば使ふ程强健になるものと覺知して無暗に働いて身體、四肢を使用して五年十年連續した。又每朝空腹の時に壇水を飲み、胃腸を洗ふ積りで、始めは薄ぐ少く、漸次濃く多くして今でも何十年繼續して居る。壇水は胃腸を丈夫にする點に於て莫大の効能がある。實は私は今年六十六歲であるが、壯者を凌ぐ頑健な身體は斯くして得たのである。是れが私の健康法で今では迚も八ヶ月で生れた男とは見へませんほど丈夫で、杖も要なし、眼鏡も用ゐず、勿論新聞はスラ〳〵と讀んでゐる。

反對集

WOM

□日本では男が先に步き、西洋では女が先に步く。

□日本では左が上座、西洋では右が上座。

□日本では先づ男に挨拶をするが、西洋では女から先にする。

□日本婦人の襟は右まへで、西洋婦人は左まへである。

□日本では食事中に談話をするなと敎へ、西洋では談話し乍ら食事せよと訓へる。

□日本では食事の前に菓子を出し、西洋では食後に出す。

□日本では若い婦人程白粉をつけるが西洋では若い婦人は白粉をつけず、年寄になる程却つて厚化粧をする。

□日本の婦人は人前で子供に平氣で乳を飲ませるが、西洋婦人は人前では決して乳を飲ませぬ。

□日本では鯛を珍重するが、西洋では猶太人の食べる物として卑しむ。

□日本では鮭はまづ下等の魚だが、西洋では一番上等のお魚である。

□日本では酒は燗して飲み、西洋では冷して飲む。

□日本では嫁が姑を怖かるけれども、西洋では婿が姑を怖がる。

札の切れ目

伊藤憲郎

金の切れ目は縁の切れ目といふ話があるが、これは札の切れ目は運の切れ目といふ話である。

或る田舎の水利組合に使はれてゐるSといふ工夫、その月の給料を貰つて借錢を支拂ひ三十六圓ないにがし殘つた、翌日久振りに隣村に出掛けM飲食店で一杯飲んだ。

飲むほどに醉ふた、彼はもう大儀である、三里の山道をトボ〳〵歩いて歸つては折角の酒の醉がさめる、何處か旅店で泊るときめた

醉ふてはゐるが氣は確かである折柄相客は多かつた、彼は巾着を腰に付けては安心がならぬと着てゐるヅボンの中にそれを入れた。勿論足頸は紐でからんであるから拔け落ちることはない。

寢た、五體を廻ぐる血の暖かさにぐつすり寢た。

……明方、ふと眼をさました確かなつもりで確めたヅボンの中の巾着がない。さあ大變——彼は立ち上つた、入れたヅボンの足頸の結んだ紐が解けてゐる。

彼は見廻した——溫突一つに相客十人、眞夏のことである、四方の扉は開け放してある。

旅宿の主人はやつて來たが、兎に角駐在所に届けねばならぬと呟くだけであつた。

警官は客を調べたが手掛りはない、いつもやる手だ、浮浪人狩を始めると一人の浮浪者が風を喰つて村から逸走したことが二三日して判つた。

電話手配——なんの苦もなく網に掛つた、身體搜査——所持金十六圓ないにがし、十圓札一枚一圓札六枚あとは小錢。

その男はS工夫と同じ日同じ飲食店で酒を飲んでゐて、同人が巾着から金を出してゐるのを見たことがあると迄は供述するが、頑として自白はせぬ、けれども十六圓なにがしを所持する理由に付ては供述が支離滅裂である。

檢事局に廻された、檢事の被害者に對する取調は旨く行つた。

檢事　お前の盜られた札に何か心覺えはないか。

S　十圓札はたしか中央が八分ほど横に切れてゐました。

檢事　（この時押收の十圓札を初めて出す、供述と符合する）これか。

S　（受取り喜ぶ）これに違ひありませぬ。

檢事　一寸待つた、一々所持金の特長を覺えてゐるといふのは少し異例だ、どうしてその切れ目を知つてゐたか。

S　御不審は尤もであります、私は水利組合から一圓札で六十何圓の給料を貰つたのです、ところで同じ組合の工夫で十圓札で貰つた男が私に兩替して與れと申しました、そうして出した十圓札がこの十圓札です、見るとこの通り汚い、おまけに裂けてゐる、小言をいふと札に變りはないといふのです、仕方がないから受取つた譯で、そのときからこの札に心覺えはあるのです、私の札に間違ありません、私がぐつすり寢てゐる間にあの男が足頸の紐を解いてヅボンの中から巾着ぐるみ盜つたんです、そうして運惡くこの十圓札だけ使ひ殘してあつたんでしやう。

それにしても盜られ方はのろまか箆棒だが、盜つた者は泥棒に違いない、檢事の手から裁判所に起訴さるゝ運は定まつた。天網恢々疎にして洩らさず、なにとはなしの札の切れ目、それは惡人を懲らすための使命であつたやう。

◈筆のしづく

吉田莊一

◎久原京城事務所長の小瀧さんが、內地へ引揚げる。一流の奇文もモウ見ることが出來ぬと思ふと寂しい。

◎仁川の茂木（野田醬油）さんも、本店電役となつて、東京へ引揚げる。これは今後大に書くといふ約束。

◎茂木さんといふ人は、趣味がひろい。洋畫、寫眞、謠、仕舞、短歌、俳句……それに例の鍼灸術だから仁川各方面から『辭職して仁川の人間になれ、我々を見捨てるとは薄情！』先生八方から攻め立てられて『ムゝゝゝ』

◎木浦の福田さんの手紙の端に晩春の流るゝ水を眺めつゝ若葉の蔭にものうくも泣く

社會現象としての、普偏化的文化科學の一、——それが社會學。

だから私は

漫畫家　笠原ふみを

小供

小供の顔が、私の視線とぶつかつて、ニッコリと崩れたとき、すばらしい愛情の波浪が、私の心の底から湧き起ります。

すると小供の體は、小舟のやうに、私の膝の上で戯弄されます。

小供の柔かな手が、私の首筋に絡みついたとき、すてきな感覺の衝動が、小供の體をしつかりと抱きしめます。抱擁——愛撫——接吻——とてもナイーブな氣持。

まるで私は、神樣の御相手をしてゐるやうな……。

だから私は、小供は好きです。

草花

樹に咲く花——よりも草花——而も小さな——その鉢を陽あたりのいゝ窓際に据へて、ぢつと眺めてゐると、柔かな光のなかで、あるかなきかの風に、微かなゆらぎを見せます。明い微笑です。

すると私の心は、震いつきたいほどの愛しさを感じて——それがいつしか、無我の境地を彷徨ふ私となるのです。

私と草花とは、水素と酸素のやうなものです。

だから私は、草花が大好き。

カツフエー

勿論氣持のいゝカツフエー。

其處で、隅つこのテーブルを占領して、一杯の紅茶を、チビリチビリと飲むのです。とても美味しい紅茶です。

スプーンで掻き廻してゐると、美しい女の顔が、ポッカリと浮びます。そしてニッコリ笑ふのです。それをスプーンですくつて咽喉に流すと、腹の中で彼女が囁きます。

あなたを愛してあげるのは
カツフエーばかり
そしてあなたの戀人は
紅茶に寫つた私の顔……

だから私は、カツフエーが好きです。

詩作

詩は心の淨化——その表現。と云ひ得たら、何と美しい、そして自由な世界でせう。

現在の社會組織に不滿の人は、其處に生息する人々の、道德——人情——其の陰險と輕薄さに堪えられぬ人は、詩の世界に逃げてゐらつしやいと、私は云ひたい。

詩は宏大な世界です。自由の天地です。そして美しき感情の育まれるブラツアです。

詩は私を、この美しいブラツアで樂しく愉快に遊ばせて呉れます。

だから私は、詩作が大さう好きなのです。

哲學と社會學

宇宙觀の樹立——それが哲學。

社會現象としての、普偏化的文化科學の一、——それが社會學。

そのやうな理論は別として、哲學と社會學の研究は、私をして、海上生活者のやうな氣持にして呉れます。死とか、生活と云ふものを超越させる場合があります。

時には又、未知なる島々の發見——其喜び。

時には又、濃霧に包まれた不安——其絶望。

丁度航海するやうな氣持です。

だから私は、哲學と社會學が好きなのです。

警官は客を調べたが手掛りはない、いつもやる手だ、浮浪人狩を始めると一人の浮浪者が風を喰つ

圓札で貰つた男が私に兩替して呉れと申しました、そうし

晩春の流るゝ水を眺めつゝ若葉の蔭にものうくも泣く

◈ズボラの話

吉田莊一

◎新聞記者は、ズボラなものだと或る一部ではキメてゐるやうだが、なか〳〵さうした速斷は下されないのである。

◎これは本誌原稿で、直接體驗したことだが、日日の森次郎氏などは、なか〳〵堅い人物だ。約束が半日違つても、チヤンと豫めその旨を通報して來る。待たせて置いて、結局小便するなどは、絶對にない。

◎それから朝新の野崎氏だ、ズイ分本誌に書いてもらつたが、その原稿は判で押したやうに、〆切りの前日の午前中に來る。

◎井上氏（大朝）でも、別府氏（日日）でも、一度頼んでから、曾て催促をしたことがない。催促せんでもホントに大丈夫だからだ尤もボズラの神樣のやうな人もある。一年も前から『今度は書きますよ』お禮をいはせておいて一度も書いたことがない。

【一五】

消防よりも建築の方が

小熊九萬造

◇

先達て誰だつたかが來て、三十年後の大京城の消防設備如何と問ふた。知らぬと云ふ大膽な答が出來ずに、そら來たと云はぬばかりに二三の即答をしたが、實は當惑したのであつた。

◇

此の間の狀態から推測すると、日本の世間では未だ消防と云ふものに本當の理解を持つて居らぬやうだ。火災を免るるには消防に依賴すれば足ると思つて居る。成る程消防は文明各國の何處にもある龍と言へば雲之に從ふ如く、都市あれば必ず消防がある、が之を以て、火事を防ぐのは消防なりと斷定するのは正鵠でない。消防は火事を防ぐには相違ないが火事を防ぐのは消防ばかりでやれるものではないのである。

◇

論より證據東京には消防屯所が大小七十、消防員が司令長以下二千五百二十二人、消防用自動車が約八十臺、火災警報があれば十臺二十臺の喞筒は即座に集まる。昨年燒けた議院の火災には五十三臺の消防喞筒車輛が同院を包圍したけれども議院は瞬間に燒けて仕舞つた。去る三月の巢鴨六百戸の大火には二十臺の喞筒が出たのにあの通りである、其の他斯んな例は澤山ある。之は東京は木造市街であり、就中大震火災後は甚しきバラックだからである。尤も議院は大震火には免れて居たのであるが矢張バラック同然の木造建築であつたのである。

◇

ソコデ分るでせう、消防の設備ばかりで火を消し得ぬと云ふことが。市街の防火を考へる方は能く此の點を忘られぬことが肝要だ、消防は防火萬能には成られぬ。苟も消防の職司として斯んな事は言ひたくないが實際だから仕方がない、但しさうかと云つて消防設備を疎外するのも亦大なる間違ひである。

◇

消防がなければ火事は消へぬが前にも言ふた通り消防は火消しの萬能者ではない、言いますよ、能く聽いて下さい、もうお分りかと思ふが、本當の防火者は建築なのです。建築上から火を免れる工夫を講ずるのでなければ虛です。丙地でも朝鮮でも火災に遇つて居るのは、建築が燃えべき材料や構造であるからです。

◇

尤も燃へない絕對の建築は生活上、經濟上不可能であるが、或る程度の防火建築をせなければ消防ばかりで火災を免れしむることは出來ないのです。さうして、或る程度に及びかねてる無防火建築から起る火災を拾ひ消しするのが消防なのです。此の調子に建築が主となり消防が從となつて、主從相俟つて都市の防火を安全にして行くのが方今の都市防火の方針なのです。

◇

御承知の通り都市計畫法に、防火地區と云ふのがあり、又其の姉妹法たる市街地建築物法に防火建築に關する條項が細々と定めてある、若し是等に重きを置かずして火事の一切を消防に依賴するならば、未だ都市計畫の眞の叫びではないだらう。

◇

都市計畫は住者の安全生活を期するにある、防火建築は其の中の保安の部分である。此の部分で充分に建築防火を要求し、而して其の足らざる所を消防を以て補ふと云ふやうに、建築を主とし消防を從として參與せしむる制度でないと、仲々防火の目的は達せられぬ然るに消防を主として建築を從として主從を顚倒して居るのは、未だ都市計畫に研究がないか、又は貧乏都市か、或は公共觀念に乏しくて自治に覺醒して居らぬ證據である。

◇

日本はまだ恥しい時代である、燒けない家を建て、消防の御厄介にならぬと云ふ見識にはまだ到達して居らぬ。燒ける家を作つては消防と市民に迷惑をかけて居るのである。如何に誇るべき消防の設備があつても、燃性の市街に滿足して居てはまだ其市街の誇りとはなれぬ、ばかりか却て一文吝みの無智を示し居るやうなものである

京城雜筆

なれぬ、ばかりか却て一文吝みの無智を示し居るやうなものである

◇

京城は流石帝大も出來た程の學問、政治、經濟の大都市なるだけ疾くより此の點に覺醒して居る。まだ發表にはなつて居らぬが、都市計畫や大京城など云ふ叫びは古くから度々聞いて居る、朝鮮建築會なども近頃建築規則の草案が成つて普く諸方面に意見を徵して居る、其の熱心には感謝せざるを得ぬが玆に一つの忘られてはならぬ注意がある。

◇

と云ふのは、出來上つたときの規則の執行能力に就てである。立案も骨が折れるが、其の出來た規則が執行されて行かなければ立案者の骨折損である、損は構はぬとしても、肝心の都市計畫の目的が達せられぬ。だから建築會が其目的を達せんとするならば、立案と同時に其の規則の實行即ち發布された後執行能力に就ても一考慮を要する。官報に登載發布されて我事成れりとするやうでは熱心がまだ足らぬと思ふ、即ち其規則執行の任に當る機關の組織をまで考へて貰ひたい。

◇

なぜかと云ふに、現行の市街建築取締規則も官報で發布された、且防火條項も立派に規程されてある、がまだそれが目的の効果を現はして居らぬ。防火設備施行の命令權を警察署長に與へても唯權限を與へただけで、其の執行に當らしむべき機關、即ち役人を與へてない、警察官の增加もせず、技師の配置をもなさずして建築規則の執行取締が出來るものでないことは分り切つて居るのである、だから同規則が發布されて以來も京城市街が防火味を增さぬのみか近頃は火保關係などもやかましいが益々防火市街になつて來る。

◇

勿論規則を發布するときに、實行はどうでも先づ發布さへすればなど云つたやうな、眞劍味の缺けたものでなかつたことは萬々信ずるが、今日の結果から見ると當時の發布者の意中を聽きたくなる。後の立案者發布者及現に大京城の建設に奔走せらるゝ諸賢は一應此の點に鑑みて貰いたいと思ふ。段々我田が深くなるから溢れぬ先きに此位で止める。

◈書物の神樣

平田久雄

總督府圖書館の內部で、アレは書物の神樣ぢやと敬服されてゐる人がある。島崎さんといふ『その事なら洋書で誰の本、漢書で誰の著書、和本なら何に詳しく出てゐます』何を質問しても、知らぬといふことはない。しかもページまで覺えてゐて、パラリ本を飜すと、忽ちそこに出て來る……。

有と無

井上要二

余嘗て聞く、釋迦如來は世の中の森羅萬象はすべて佛性ありと說けりと。然るに高僧趙州和尙に對し其の弟子或時狗子を見て狗子に佛性有りやと問ふ、和尙答へて曰く無と釋迦如來は有と說き、趙州は無と說く。勿論趙州は智德に於て釋迦如來に及ばざりしや遠からん。然れども彼も亦佛道の大悟者なり、其の僧にしてこの答ありたりとせば有と無との意は合致せざる可らず。この言は佛性といふ語より說明を要する事なるべきも、兎に角有と無、理論上より合致する能はざることなり、合致すること能はざるが如きもの合致せざる可らざることゝなれり、これ妙味ある所なるべし。余は斯の言を了得せるものゝ如く又了得せざるものゝ如く、又時に了得し時に了得し能はざることあり。數學上の理論に無限大は無限小と等しといふことを聞きたることあり。或は眞一轍ならんか。世間社會人事萬態多種多樣其の間に立ちて迷はず惑はざるの方法大に工夫を要すべきなり。

此頃の事

野崎眞三

◇

四月の中旬、京城記者團運動部が久方振りで國境新義州へ野球庭球の遠征に出かけた。新義州高等普通學校々庭で、新義州軍と對戰して五回戰、二十四對零と云ふ慘敗。記者團は嘗つて平壤軍に二十七對零と云ふレコードもあるから前古未曾有ではないが斯くの如き慘敗は決して快いものではない。譬へ斯道奬勵の精神からとしても、不愉快な思出が殘る。だが大朝の山形捕手が傷いてからマスクを被りボックスに立つと切に三人の愛兒の上を思ふ。最ら野球選手としての年でもないと今度こそは痛感した。最ら三十六歳だもの。

◇

四月二十七日夜、五年北京へ亡命流轉の候爵尹澤榮氏が昌德宮殿下御危篤の急報に依つて六年振で歸京するのである。功名手柄に焦つてゐる京城記者團の面々は何れもコツソリ特種を得るため手筈を決めた。其汽車は午後九時三十分京城驛着である。新村迄出迎へたのは毎日申報の洪君と他に二人、顔見合せて苦笑した。京城驛頭には六七人の同業と寫眞班子が待受けたが尹候爵は警務當局の差金で巧みに汶山驛で下車し、昌德宮から差廻の自動車で漆黑の闇を突いて一路疾驅したのである。生馬の眼を拔く筈の十何人の新聞記者諸君は何れも藻拔の汽車を迎へて眼を白黑、遂に尹候爵は新聞記者團の警網を潜つて誰一人インタービューが出來ずに終り逆に生馬の眼を拔かれた。私も勿論此仲間の一人であつた。

◇

歌舞音曲停止が二十七日から三日間續いた、京城市中は火の消えたやうに靜寂を極めたが、由來、此歌舞音曲停止は罰則がないので、萬々一此期間に亂舞高唱しても高々警察犯處罰令の罰則。未だ禁を犯すものがないから良いが無遠慮に犯すものが出來たら大變である。殊に食道園其他が二十五日の故殿下御危篤以來自發的の休業を目睹して、歌舞音曲停止の如きは府令で發布なぞせぬ方が良い。罰の輕重を考へてから法を犯すもののある今日、道德的な御布令は出ないのに限る。寧ろ大衆の赤誠の溢れとして自發的の歌舞音曲停止こそ國葬哀悼に相應しいと思ふ。

◇

石井漠君が來る、本居姉妹が來る、藤間靜枝女史の一行が來る。ホンとに此春から夏へかけて賑かである。內鮮融和も日鮮融合もない、朝鮮の大衆の生活が單なる產業開發や教育振興の理屈一點ばりでなく、潤いのある惠まれた生活に置き換へる事が第一だ。理論の上で誰か朝鮮併合の事實を云爲し得るものか。殘されたのは感情だ、ホンとに潤のある惠まれた生活が一日も早く內鮮人を一緒に抱擁して呉れる日を祈りたい。

◇

馬車馬生活には凝視の時間が必要だ。好な句作の暇も與へられないプロレタリアの生活を呪いたくなる。それでも寢床に匍つて自已を凝視する、詩を思ふ……思つてゐる中に寢てしまふ。馬車馬は悲しいものだ。

◇

飛上がつてもあが手花にとゞかず。
叱り過した父親よ朝の連翹眞っ黃。
クタ〳〵な袴から肢を出し花見酒(いな)まず。
春の水に浸してゐる肢は莫迦に長い。

隨分樂し相に見受けます。
◎此頃南山に登つてその數百米

平南だより

市村毅

◎德川郡から孟山郡へ跨る山地へ餘程緣があると見えて、又々足を踏み入れることになりました。昨年は夏から秋の初めへかけて、その前には秋の初めから冬の初めへと、此附近で日を送りましたから雪に埋もるゝ極寒の時季を除いては、殆んど此地方の自然の變りに接し得たわけになりまず。それだけ此地は懷しい處であり然も忘れられぬ處となりました。

◎京城あたりでは既に葉櫻の頃でありませうに、此山谷間では五月の始めにも拘らず、今漸く春が訪れて來た樣なのどかさを見せて居ります。溪間を歩いても、山を登りましても眞ぐ眼に着きますのは美しく裝はれた草木の花の色と初々しい若綠とであります。梨、桃、杏子、ユスラ梅、ツツヂ、タンポポ、スミレなど、白や淺紅や或ひは黃に紫に夫々姿を變へて、その中でもとりわけ美はしいのはやはり梨の花と杏子の花の樣に見受けます。殊に此附近は梨の名產地と申さるゝだけに、山間部落の何處へ參りましても其純白な花を見ぬことはありません。只今日此頃は生憎月がありませんので、自分の大好きな月下の梨花を見ることが出來ぬだけが、何となく物足りなく思はれてなりません。

◎灰色の石灰岩が突立つた山稜などを傳はつて行きますと、杏子の花が崩え出やうとする若綠の中に際立つた彩りを見せて居ることがあります。何と言ふ愛らしさであり、美はしさでありませうか。毎日冷たい石塊許り相手にして居る吾々地質研究者でさえ、それを見ると思はず肩の凝りがとれ、心が柔げられて、自然讃美に心が傾いて行きます。

◎近頃山の肌には鈴蘭が枯草の中から芽を出しかけて居ります。彼の處女の樣に葉陰から羞んで見せる小さい眞白い花の群と芳香とに思はず吸ひ寄せられるのも眞近いことでせう。又その頃には木苺がそちこちに花を開いて、やがてそれから生れ出るルビーの樣な實が山の斜面に見え隱れするのを喜ぶ日が近付いて參りませう。

◎山の中の春から夏へかけては殊更に平和であり、のどかであります。松山の中などに鳴く山鳩の聲に耳を傾けて居てさえ寂しさなどを少しも感じません。只今は此邊での繁農季でありますから、野山の畑の到る處に老若男女総出で仕事をして居りますが、牛を曳く親爺の顏にもその後から種子を蒔いて行く息子の顏にも、又土をかけて歩く嫁さんの顏にも喜びと希望が漂ふて居ります。その中でも高い山の頂で住ひをして居る火田民などは、冬の劇い寒さの間暗い溫突の中に閉ぢ籠つて居ただけに隨分樂し相に見受けます。

◎此頃南山に登つてその數百米の斷崖の上から脚下に大同江の迂曲する流を瞰下しても、遙るかに道界に聳え立つ高峰の群を眺めやつても、又德川の渡船に乘つて居て、寧邊の方から流れて來たと此あたりの老人共が物語りする、江畔の申山のくすんだ石灰岩に崩え立つ若綠を見上げても、秋から冬への凋落の淋しさとは違つて、何處も彼處も延んびりした氣分が溢れ出て居ります。殊に朝早く桃田里や槍安里あたりへかけて江畔を辿りながら瀨の音を聞き、或は渦卷く瀞の色を見詰めて居りますと自然と世の中からかけ離れた落付を覺えます。

◎宿舍の開戸を開けて見上げる對岸の新綠は、日毎に鮮かになつて行きます。また此あたりで一番雄大な長安山のなだらかな黃褐色の斜面も、一日一日と凋落から蘇へらうとして居ります。もうこゝ暫くするとあたりの姿はすつかり趣を變へて、いつか深綠の蔭に囁く泉の冷たさが戀しい頃となりませう。それにつけてもヂリ〳〵と照りつける烈日の下で、汗みどろになり働いた昨年の夏のことが思はれてなりません。

（一五、五、八）

◈番茶の香り

平田久雄

田中丸醫師の馬好きは有名なものだが、ゴ當人の曰くさ『誰か馬の雜誌をやるものはないかな、馬の雜誌なら少々金を出してもいゝがな』むづ〳〵してゐる雜誌病者諸君、どうだね田中丸醫者を社長サンに擔いでは……。

京城雜筆

夢

廣田康

植物園から動物園へまわる。春の日は實に麗かに照り渡つて居る美しい小禽が籠の中で歌つて居る方へゆく。美しく著飾つた人々が澤山に集まつて來る、綺麗に髪を結つた婦人もあるし、洋服のすつきりした紳士も居る。少しつかれたのでベンチに腰を下ろした。ふと目を上げるとすぐ前には鶴が長閑な歩き振りをしてゐる。向ふの猿の處は不相變人氣が集まつてゐるなどと考へると、上野や淺草を思ひ起したりした。ついうと〳〵となるので靜かに目を閉ぢる。實にいゝ時候となつたものだ、丁度東北地方の四五月と少しも變らない樣な氣がする。連翹も咲きこぼれてゐる、何だか故郷へでも歸つた樣な感じが起る、それに大分知己も多いなどと、それからそれへと考へて見ると連想は中々盡きない。目はうつとりとして來て何時の間にか全く閉ぢてしまう樣になる、ハツト思ふと眼前をまざ〳〵と白衣戴冠の漢子が無言のまゝ過ぎて行くので、又しても空想が破れて現實の我に荒々しく引き戻される。故郷も連翹も何もかも何處かへ吹き飛ばされて了まつた。

×

朝鮮銀行前といふので電車を下りる、右手に高く青木堂の建物が見える。青木堂だなと思ふと程なく行けば更科があるが、また少し行くと神社を横にして藪そばが控えて居るかの樣な氣も起る。赤門が幻覺の樣に現はれて來そうだ。三越がある、丸善、本はないが運動具が並んでゐる。ぶら〳〵と散歩をする。夜店こそ見當らないが銀座へでも出かけた樣な風なことを考へ乍ら本町を過ぎる。明治屋がある、龜屋もある、なつかしそうに飾り窓を覗いて見る樣な氣分を起す。中々に人出が多い、明るい灯しが目を射る樣に輝いてゐるどんな物でも不自由なく求められる。かねて御馴染の同じ樣な店が同じ樣に明るい燭光を輝かせて、自分達を誘つてゐるかの樣にも見受けられる。序でにカフエにでも寄つて一休みする。都の香りを浮べてゐる一杯の葡萄酒に對して散歩のつかれを休め樣とも思つたりする。何時しか色々な空想を描き乍らこの都府の人が樂しむ所謂本ぶらの歩を靜に進めると突然、後ろから車屋の威勢でどやしつけられる。つと道をよけて仰ぐと、眞赤な高い龍宮の樣な建物がはつきりと目に寫つて來る。いやこれは朝鮮舘だなと思つてハツとすると銀座も赤門も藪そばも一緒くたに遠い遠い彼方へ吹き飛ばされて影も形もなくなつて了まつた。

×

全半島を擧げて深い哀傷に沈みきつてゐる。××宮の御門の前では幾百人の男女老幼が哀傷の聲を斷たない。××通りの商店は皆半ば戸を閉ぢて深い哀悼の意を表してゐる。軒毎には弔旗がへんぽんとして飜り、之を射る春の日ざしも何となく悲しみを催さしめる樣な鈍さである。××宮の正門を通り奥深い御玄關に額ついて、恭しく敬弔の誠意を捧げたのは×月×日の午後であつた。寔に高貴の方にも免れ難い傷ましい御不幸である。ド々の者が慕ひ奉つての限りない哀惜の涙である。その衷狀は古今東西何處も同じで無心の花さへ、風のないのにちら〳〵と散つて來た。二三人先立つ人々が退出するのに出逢ふ、その絹帽の黑い喪章が目に殘る。自分達もやがて靜かに退出する、車は今度は伺候のときとは別な門から罷り出た、禁衞の兵士達の屯所の前を過ぎて一寸引返へしたりしたが、結局門外に出て松の立ちならぶ道に出た道はそう廣くはない、白い道の塵が靜かに立ち舞ふ中に春の日影が靜かに映つてゐた。するとこれは又何といふ出來事だらう、禮裝の白いワイシヤツの胸には生々しい赤い色がしみ出て、顏は蒼白になつた人が倒れかけてゐる。一人が介抱してゐる樣でもある、殉死！突としてある考がひらめいて來るそれにしても門外の老弱男女は何事も知らないかの樣にまだ哀傷を續けてゐる。一人二人佩劍の人が馳けつけて來るのが見えたが、自分達の車は音も立てずにツト辷り去つて了まつた。然しこれは春の眞晝の夢ではなかつたのか、自分達は又してもかうして現實に打かつてしまつたのだらうか。暫らく日數が經つてからこの日の出來事が詳しく報知された。自分達は今更ながら夢の樣にあの御門外の出來事を回想してゐた（五、一二）

然るに今日に於ては、ハムの子孫も、セムの子孫も、ヤペテの子孫も、男女共同生活と云ふ名の下に

見える。青木堂だなと思ふと程なく行けば更科があるが、また少し行くと神社を横にして藪そばが控きってある。××宮の御門の前は幾百人の男女老幼が哀傷の聲を斷たない。××通りの商店は皆半

隨見隨錄

木塚常三

バベルの塔

産業發達、都市集中の弊はストライキを伴ふこと今も大古も變るなきが如く、創世記第十一章に在るバベルの塔の記事は、今日の所謂ストライキの始まりではないかと思はせられる。創世記々者は言ふ、當時全地は一の言語、一の音のみなりき。玆に人衆東に移りてシナルの地に平野を得て其處に居住り。彼等互に言ひけるは、去來甎石を作り、之を善く熱かんと、遂に石の代りに甎石を獲、灰沙の代りに石漆を獲たり。又曰いけるは去來邑と塔とを建て其塔の頂を天に至らしめん、斯くして我等名を揚げて全地の表面に散ることを免かれんと。エホバ降臨りて彼の人衆の建つる邑と塔とを觀たまへり。エホバ言いたまいけるは、視よ、民は一にして皆な一の言語を用ゆ、今既に之を爲し始めたり、然れば凡て其爲さんと圖る事は禁止め得られざるべし、去來我等降臨り彼處にて彼等の言語を淆し、互に言語を通ずることを得ざらしめんと。エホバ遂に彼等を彼處より全地の表面に散らし給ひければ彼等邑を建つることを罷めたり。是故に其名はバベル（淆亂）と呼ばるると。

目下産業の最も發達し富の最も集中したる英國には大龍業勃發し淆亂の極に達せるにあらずや。是は亦た英國同樣、富と力の最も集中し居る米國にも波及する恐ありと今日の記者は言ひ居れるにあらずや。實に天を摩する數十階の大建築物はバベルの塔よりも高く、國士の大、人衆の群がりは當時のシナルの地に幾千、幾萬倍するを知らず。而して是れ皆な煉瓦の文明、セメントの文明にあらずや。神は男女を同權には造り給はず、創世記には明かに其旨を記しあり

然るに今日に於ては、ハムの子孫も、セムの子孫も、ヤペテの子孫も、男女共同生活と云ふ名の下に當時のソドム、ゴモラよりも甚だしき非行を爲しつゝあり。神の怒りの火は必らずや是等增長の民、非倫の民に降らん。

豪傑笑ひ

日本には地質の關係上、又た富の程度上、未だバベルの塔ある能はざるも早くも心にバベルの塔を築きつゝあり。彼の豪傑笑ひの如き、正しく神を無視し、人を蔑視する驕慢の發露にあらずとせんや唯々我等の未だ失望せざるは、彼の笑を世人が豪傑笑ひと呼びて英雄笑と稱せざる事なり。日本の常識は未だ英雄と豪傑とを間違へざる程に頼母し。

更ながら夢の樣にあの御門外の出來事を回想してゐたハ五、一二）

京城雜筆

◇金谷園の夕

雜筆記者

この間中島司さんが東京から遣つて來たので、舊友十餘名が、長谷川町の金谷園に集つた。

○

藤村、中村（健）、奥田、伊藤（韓）大島（勝）、方合榮さん、その他といふ顔觸れ。

○

席につくと『お互に年をとつたなア』と誰かがいふ。それから伊藤君の肥滿、奥田君のいつまでも髮の黑いことが問題となる。

○

酒三行『オイ書いちや不可ん』といふ前提で、奥田君の告白に、『この間或る所へ行つた、醉つた鳥渡肘枕で寢た。馬鹿に頭が痒いので、目を醒ます、うちに歸つてからも二三日痒い、どうしたんだらうと思ふと、寢たまに、君塗られてゐる。何をッて知れたことよ髮染めぢやないか……』どつと笑はせて『君、髮染めもいゝが、一週間もすると髮の根がのびて、白いところがズッと搦ふからね、臆劫がりにはアレは禁物ぢや……』

○

主賓中島氏『十二年住んだなつかしい京城に來て、たつた四五日それも自由に遊べないのは、何といふ寂しい旅でせう……』

○

聞けば、中島氏の朝鮮研究會では、先づ三十萬圓ぐらゐの基本金を作つて、丸ビルあたりに假事務所を設け、そこを日鮮關係者の倶樂部とし、東京へ上ぼる人の有らゆる御世話をする筈だといふ。

（三一）

身邊雜筆

井上收

【二二】

やうに、手紙も返事を貰ふと嬉しいものである『私は筆無性で』などゝいふものは、誠意のない人だときめて差支ない。

いくら忙しい人だつて、飯も食はず糞小便もせずに多忙に沒頭する者はあるまい。出會頭におじぎをしても、返事もせず、頭もさげないのと同じことである。

◇

人を訪問し、名刺を出すと、その名刺の扱ひ方で、ほぼその人の人格が判る。鄭寧に、肩書から、住所から姓名の文字まで見る人もあり、話をじながら、飴ん癖のやうにくる〳〵卷いて弄ぶのもあり鉛筆を出して、いたづら書きをする人間もあり、うなぎの指ぐしのやうな針に、胴まん中より差し通す役人が居る、これが一番ぞつとする、名刺の扱ひ方である。

◇

端午の節句に、兒童愛護講演を頼まれて仁川に行つた。桃の節句といひたいほど、沿道に桃の花が咲きほこつてゐた。

桃の花梨の花さく岡の上に節句
幟のやゝ高く舞ふ
端午の日仁川街道をわれ行きぬ
紅白の李は野にも岡にも
禿山の麓をめぐり紅く咲く桃の
村々牛の遊べる
朝鮮は櫻さく日の晩くして眺め
もあへず夏は迫りく
紅の裳曳きつゝ岡の邊に藥草を
摘む朝鮮少女はや
葛木梓君、夫人眞弓君、ある日
その愛兒の宮詣りの歸途、私の勤
先を訪問して呉れた。
あれし子の宮詣でして歸るさと
めでたき人のおとなひたまふ
よき人は妹脊の契りにあれし子
の名を春作となづけ玉ひし

いゝ齡をした、分別盛りの紳士が、上品なお婆さんを伴れ、寫眞機を持つて、あちらこちらを歩いては、お婆さんをカメラに納めて居る、母子の姿が、譯もなく嬉しく羨ましかつた。私も父なり母なりを、かうして春の野邊を伴れ歩いたならば、親の喜ぶことも、親の爲に結構であるが、私自身がどんなに樂しめるか知れない。

かういふことが、親孝行といふ部類に屬するものか、と考へるより先に、親子の、それもあの双方共にいゝ齡をした者が、この世にながらへて、自然と人生を心ゆくまで逍遥するといふ、夢の樣なシーンが、堪らなく私の胸を突いた

◇

人が手紙を出しても、碌に返事も呉れない人のあるのは寂しい、その人は忙しくて、手紙を書く暇がない、といふ。この世の中で、忙しくなく、遊んでゐる人間が一人だつてありやしない。

忙しい間に手紙をかき、返事を出す、そこにこそ眞實の人間がある、暇な時に認めるやうな手紙に碌なものはない、眞實のこもる手紙の書けやう筈はない。

手紙を出して返事の來ない位、頼りないものはない、池か何かに石を投げても、トボンとか、ブクブクとか、何とか反響があり手答がある、と力強い何物かを感ずる

◇

下村海南博士が、人間が歌を詠むうな、心持になつた時が、一番偽りない時だ、といつたやうなことを、かつて新聞及新聞記者の誌上で述べられたことがあつたが、近頃は沁々さういう心持に引づられてゆくやうな氣がする。それにつけても、私が多年唱へて來た……ほんの自己陶醉ではあるが――童心即藝術、といふことが滿更でないやうな嬉しさを感ぜぬ譯にはゆかない。

さき頃、昌德宮拓殿下がお薨くなりになり、それでなくとも、隨分忙しない日常を送つてゐる私は久方ぶりに、生活爭鬪の渦中から脱し、暮れゆく春の一夜を、川田順氏の歌の世界に語り、それこそ俗塵を離れた、尠くとも私達にとつては、淨い時を持つたのを悦ぶ

◇

私は亡くなつた子供については隨分深刻な、レコオレクションの所有者であり、自分乍らも不思議に思ふほどである。兩親の死に對してはさまでの追慕を感じない、それは不孝な子だ、といふ批評家もあるか知れないが、嘘もかくしもなく、兩親に訣れてこのかた、夢にでも一度會ひたい、と思ふことはなかつた。

所が、ある日曜に、子供を連れて近郊の山や公園を散策した。

惱ましく曇れる空の雲間より雨さへ催す藤の咲くころ。

川をわたれり山櫻花。
山川の流れ眞白にかつ風にちる

藤と櫻

近詠四十章

廣田角

惱ましく曇れる空の雲間より雨さへ催す藤の咲くころ。

をり〳〵を明かるくなれる曇日の雲の切れ間ゆ日は藤にさす。

藤の花さき咲き垂りぬ軒につる す目白の籠にとどかんばかり。

紫の藤の花さき摺りゑぜし目白いよ〳〵高音になくも。

垂り咲ける藤の花かげ軒につる す籠の眼白の水あびてけり。

新らしき目白の籠の日にひかり其所に垂れ咲く藤の花かな。

藤の花はなを上れる蟻もあり軒をくだれる蟻もありけり。

事念に子供は舟を作り居りたり咲く藤になかばかける椽。

いたづらにあきし子供は日曜の午後讀本よめり軒の藤かな。

日曜の晝のしづけさ庭の面に咲き極まれる藤はこぼれつ。

藤の花家根の上にも咲き垂れば瓦にすりつ花のよごるる。

晩春の雨にそぼ濡る家根瓦家根にたり咲く藤の花かな。

藤の花あまたの房の咲ける頃生きとし生けるもの〻美くし。

晩春やなやましき眼にしむるなる山吹の黄色藤のむらさき。

総督府のもとの廳舍に博覧會の藝者踊りや藤の咲くころ。

藤の咲く五月の白日餘興場に踊る少女よ涙わりなし。

藤の花こぼる〻ところ踏まるれど蟻はそのままみちつくりをり

蜘蛛と黒ろくつゞける蟻の群こぼれて紊だす藤の花かな。

けはしかる心となりて藤の花咲きゐるを見つ〻何も語らず。

藤の花山吹の花咲くところ晩春首夏に泣きぬれしころ。

花吹雪身にあびつ〻も洗足にて川をわたれり山櫻花。

山川の流れ眞白にかつ風にちる櫻あり散りやまずけり。

山川の一ところ川のひろきところ岸にも咲けり櫻多き山。

一山は悉く花の櫻にてくもれる晝をしづもりの深かし。

花片の流るるはげし山川は櫻の花の川にてありけり。

手を洗ふ水の底にも櫻花咲き盛かり見ゆ山川いとし。

山川の石の起き伏し面白し仰げば白し山櫻花。

曇り日の雲につづける峰のところ眞白く見ゆる櫻なりけり。

山櫻わかきいのちの葉あかし白くさき咲く花のなかより。

咲きみちて目さむるばかりの山櫻山松風の音もさわやかか。

頰白の高々となく峠路の櫻の花に泣きもぬれしか。

學校のゆきかへりいつも眺めけりかの峠路の山櫻花。

東京を戀ひつつ山に櫻みし少年の日よ戀ひしくてならず。

峠路に櫻の花の咲くところ東京灣をしみ〴〵と見し。

中澤の母の生れし家の裏の山の櫻は咲けりや今も。

つけひもの弟を背負ひ淋しさに山の櫻を折りてかへれり（弟四歳の春母逝く）

父につれられ炭燒く小屋にゆきて見し山の櫻の忘れかねつも。

松風に鳥の音まじり松のなかに櫻の咲ける山にてありけり。

雨ごとに芹はのびたり田より田に水泡光れり山櫻咲く。

くろをぬる男の彼方山裾にとぴとび咲けり山櫻花。

孤杉を思ふ

市山盛雄

孤杉茂木和三郎氏のお供をして
池田殖產局長を訪ふ

相對ひ椅子を占めれば玻璃越の光まぶしくて氣にかかりけり

かたはらの內務局長ひそかなり時をり言葉かけたまひつつ

草間局長を訪ふ

草間局長たづぬるたびに一時間あまりまたさるるともにくまれなくに

清水技師を訪ふ

窓ごしに勸政殿の石疊しろくひかりて見おろされけり

松本氏を訪ふ

いまだみぬ永樂町人を訪ねむと自動車にありて語りきめつつ

もの申すと玄關に立てば父さまと呼びかけながら駈け來る子達

花月にて

きみをおくる宴會の席ぞあひふれし辭はつひに言はですましつ

國を離り住むといへどもふれえたるこころはとはにたもちをあらむ

いまをかも別るとあればのこさるる身をしおもひてもとなさびしき

手筋の話

將棋八段 金易二郎

第一圖面の樣な局面は、實戰の場合、屢々出來る形でありますが、此の寄せ方を、拙劣に遣ると、手損をしたり、敵陣を固めさせたりして結局勝將棋を負けにすることがあります。依つて此の合理的攻め方を講述致しませう。先づ最初に四三角成と敵銀を取ります、敵同金のとき同飛成と取るのは、所謂『俗手』で筋違ひであります。つまり敵の金銀を取つて、角を渡したのだから、駒得にはなりますが、飛車が攻擊の衝點から離れる結果、丸で敵王に利かなくなり再び四二にでも進むと五一から角を打たれ、逃げたとき四二に歩でも打たれると、一寸攻擊に困難になります。故に斯かる場合は、敵の金が四三に出たゝめ、全く遊び駒となり敵王の防備が薄弱になつたのに乘じ、同飛と取らずに、六二歩と打つのが手筋であります。敵が同金と取れば、七一銀打で詰みがあるから、同金と取る手はありません。七一金ヨルは是非なき應手です。此の時攻方は九三歩ナル、同歩、九二歩打同香、九一銀打は手筋です。之は同王と取るより外に手がない。依て七一飛ナルと敵金を取れば次に八二金打で詰みがあるから、敵は八二銀と打つより他に應手がない。其時七二龍と敵銀を取れば、詰まり銀一枚を渡して敵の金銀二枚を取り駒得となつた上次に六一歩ナルと指せば矢張り必死であります（其手順は八二龍、同王七一銀、九一王、八二金で詰みがあります）

第一圖面

九	八	七	六	五	四	三	二	一
					飛	龍		
	桂	王	金		金		角	
	香	歩		歩	歩			
	香	歩						

一 二 三 四 五 六 七 八 九

持駒 攻方 桂歩歩

（手前下手）　（向上手）

風で仲々其方の要領を得させてくれない。

『この間頼んで置いたのがあつ

二人の對話

二人の對話

小水眞二

『偉い珍らしい名前の本だな（人民の中を行く）って一體何を書いてあるのだい』書棚の中を熱心に見てゐたKが椅子についてから聞いた。

O、ア、それか夫は俺がつけたんだよ、なんでも露西亞革命の祖母（？）プレシコフスカヤの宣傳標語に主義の宣傳をするのには人民の中を行かなくてはならぬとかいつた言葉を思出して、この本の內容を表現するのに適當と思つてつけたのさ。

K、ジヤ、昨今流行の赤じやな（中を見ながら）こんな恐いのをどうして手に入れたか。

O、赤だとか靑だとか、それは內容を見てからの話だよ、つまり君がそんな事を云ふのは著者其者を聯想して起る一の謬見だよ。

K、だつて仲々手にはいる本じやないじやないか、まさか宣傳用のじやなからうね。

O、オイ〳〵戲談にもそんな事を云つて呉れるな、間違へられたら大變な事になるぜ。俺がこの本をもつてゐるの理由は只だ著者が一代を叛逆で通し、最後は斷頭臺に屍を曝したといふ點と、今一つは世間にはあまりこの本がないといふ意味からじや、が其所邊の赤に見せりや値打ものじやぞ。

K、そうかい、一體何處でどうして手に入れたのかい。

K、それがヒョッとした事から今から一昔程前、學生時代に京都の古本屋で手に入れたのさ、比叡の嵐が寒く吹いてゐる或年の暮に物好きな俺はヒキマワシに鳥打帽といふなりで、今迄の柔い方の珍書漁りをやめて、其時代の今でいふ左傾的の珍本漁りをしようと思つて一軒の古本屋へはいつた、そうして種々と店の番頭に聞いて見たが、どう俺を間違へたか警察と見たらしい。

『いや手前共の店も前にはありましたが、近頃はやかましいので且那の御存知の通り、ヘエ賣る事が出來ぬので』。

其時俺はフト店の姿見に映る自分の姿を見た、成程どうも人相がよくないわい、刑事と間違へてゐるなと思つたから、これじや駄目だ、然しどうも此店に珍本があるらしいといふ感じを持つたから、店の名前を口に繰越しながら其晩は下宿へかへつた。なんでも發賣禁止の雜誌や圖書は、其筋で發見したら沒收することになつてゐるが、そんなものに限り人の好奇心をそゝるから、法外の價で賣られるのでよほどうまいものらしい、夫丈彼等の仲間じや警察を恐れる

其事があつてから暫く日がたつてからFといふ男と一緒に其店へいつたが相變らずの身なりと來てゐるから、又嫌な奴が來たといふ風で仲々其方の要領を得させてくれない。

『この間頼んで置いたのがあつたかね』

『近頃は大變やかましいので、何處の店にも置けませんので』

『何をいつてるかい、この隣りで（見人の告白）を手に入れたよ』

『見人の告白ですか、然しあれはやさしい方ですからね』

丁度其時Fは俺に彼が今迄手に入れたいと思つてゐた古本があつた事を告げた、其時はじめて番頭はFの帽子の徽章と僕等二人が親しい友達であるといふ事をさとつたらしい。

『あなた學校はどちらで、實は今迄全く貴方を警察の方と思つてゐましたがな』

『戲談じやない刑事などに見られてたまるかい』

『是はとんだ失禮しました、實は二週間程前に丁度貴方と同じ服裝で來られた方が、研究材料にするからと有仰やるから、吉田邊りの學生さんと思つて出しましたら驚くじやありませんか警察でせう大變エライ目に會ひましたので、余程用心しないとヘエ大變な事になりますので、失禮ですが貴方の人相からヘエ實はその……』番頭は頭をかき乍ら辯解やら御世辭やらいひつゝ二階から出して來てくれたのが此本なんだ、なんなら讓つてもよいがな。

K、馬鹿いへそんなものを貰つたつて腹がふくれるかい。

O、此奴なにかのこつに直ぐ食ふ事をいふな。

K、だつて人間はパンがなくては生きられないよ。

O、それで此本はパンの製法が書いてあるといつてるじやないか

カリフォルニヤ物語

松村松盛

【二六】

を惱ますといはれる。低級なそして享樂的な大衆は、たゞ愛慾の際どい場面か、他愛もない輕業物を歡迎する。それを織り込まなかつたら商賣は成立たぬ。でもそれ丈では藝術的良心が承知せぬ。そこに先生の惱みがあるのは尤もなことだ。

『私は京都が好き、金が出來たらキット往きますよ、チッポケな盃でチビリ〳〵』と。

あの美景と低酌微吟に、憬れの瞳を輝かしながらいつた。

この邊り一帶はケバ〳〵しい女優が風を切つて遊戯する。『ア、なつて見たい、アワよくば玉の輿に』といふので、アメリカ全土の蓮葉者が、磁石に吸はれるやうに集つて來るのだ。そして振り落されたものは、カフエーの給仕をつとめながら、何遍となく出願するんだ相な。

『こゝの主人公のフエアバンクス君は、今差しかゝつた仕事のため御會ひ出來ないのは殘念です』

『また入らつしやい、私もその中御國へ往きませう』とて堅い握手を交はして別れた。

サンタモニカの濱邊

蘇鐵やペッパー樹の綺麗な並樹道をドライヴして、佐藤氏は私を郊外サンタモニカの海岸に伴れて往つた。加州特有の平家の住宅街が盡きると、石油井戸の櫓が林のやうに立ち連なる。何といふ大袈裟な都市計畫！丘を削り谷を埋め野火のやうに新市街が擴つて往くこの計畫に依ればシカゴよりも紐育よりも遙かに廣い。サンタモニカも勿論大羅府の一部である。

日がトップリ暮れて電光の輝かしい海岸通に出た。太西洋とは打つて變つて、靜かな海が眞黑な油を流してゐた。平安の海として神が惠んだ太平洋！私は今迄の暴

パサデナへとドライヴした。小高い丘上の數奇をこらしたヴィラ、

の盛んなる他に比儔を見ない。一七八一年スペイン人が開いた町

美都ロス・アンジエルス

グランカニオンから、モヂヤヴの沙漠を過ぎ、サージブラッシュの茂る曠野を通り、サン・ベルナルデーの山脈を越えると、亜熱帶の光が眩じいばかり強く、椰子の高いポンポリが、紺青の空にクッキリと浮立つ。モー太平洋——日本の岸を洗ふアノ大瀛の水が近いと思ふと、胸自ら躍らざるを得ない。オレンヂの薫る野を過ぎると南加の美都ロスアンジエルスだ。

驛まで迎へられた佐藤君と夫人とが、是非泊つて呉れとて、その邸へと私を伴れて行つた。子供さん達の多い樂しい家庭で、國へ歸つた心持に惠まれた。

君は在米二十一年、苦學健鬪した成功者の一人だ。机上ホイッテエアの勞働詩あり、愛讀措かざるものゝ如く、連りにアンダーラインを施し、『之に從へ』と書き添へてある。

齢十七日、大橋領事、宮城縣人會長齋藤氏、羅府日米新聞社主筆島内氏を訪ふ。島内氏は日本人街なる料亭川福にて快辯滔々と日米問題に付いて穿つた意見を吐かれた、逗留餘日ない私の感謝措かぬ所だ。

ハリーウッドの撮影所

鶴見副領事の紹介で、ハリーウッドなる活動寫眞撮影所、パラマウント・スタデオとダグラス・スタデオへ往く。前者には上山草人氏後者には前東大文科講師ニコルズ氏がゐる。蘇鐵、椰子、ペッパーの蔭深きアヴエニューに、珍妙な博覽會式の安バラックが建ち並んでゐるのが撮影所だ。パラマウントの上山氏は、今撮影最中で迎ても會えぬので、ダグラスへ往つてニコルズ先生に會つた。剽輕な先生は『コレは珍らしいサア、こつちにお出でなさい、御案内しませう』とて、三萬餘坪の構内を引廻はした。森林あり、城郭あり、マホメット寺院あり、壞市あり、池畔古代軍艦あり、皆紙又は薄板から成つてゐる。これが紙でせうかと、古木の幹を敲いて見れば、矢張り紙だ。それほど眞に迫つてゐる。大バラックの中には、軍艦や宮殿や汽船内の各部分を表はし、職人達が忙はしく働いてゐる。平常二三百人、忙はしい時は五百人以上も使用する相だ。

先生は一般民衆の藝術趣味の向上が遲々たるを歎じ、藝術的教化と營利との調和には、少からず頭

一七八一年スペイン人が開いた町

京城雜筆

なる料亭川福にて快祭淫々と日米問題に付いて穿つた意見を吐かれた、逗留餘日ない私の感謝措かぬ所だ。

先生は一般民衆の藝術趣味の向上が遲々たるを歎じ、藝術的教化と營利との調和には、少からず頭

つて變つて、靜かな海が眞黑な油を流してゐた。平安の海として神が惠んだ太平洋！私は今その岸邊に佇みて感慨無量だ。

何んでも、夢の國へ追ひ込まねばやまぬ軟い潮風が、サヤ〳〵と椰子の葉を搖がしてる。アの鎌のやうな月の彼方に、我が愛する黃色の同胞がゐるのだ。

× × ×

海に出張つたピーアから、遠くヴェニスの方を眺めやれば、輝かしい電燭の町が何哩もの長さに連つてる。黃金の湧く國の享樂の巷は違つたものだ。人通りの少い通りをヴェニスへとドライヴする。こゝは又サンタモニカより一しほ盛んな所、道頓堀、淺草などの遠く及ぶ所でない。ピーアに日本人の經營してる玉轉がし屋などもある。土曜日曜の雜沓は名狀することが出來ない相な。

羅府の日本人街に歸つて、久し振りに支那料理の御馳走になる。こゝは元、ユダヤ人や支那人の巢窟であつたのを、段々日本人が追出して、獨占することになつたのだ。排日條項を含む移民制限法が實施されてから、同胞は田舍を引揚げて、仕事の多い當市に集中しモー二萬人を突破してるらしい。從つて日本人街は押すな〳〵の大繁昌、神戸や長崎の一部が、羅府の眞中にあると同樣、日本物には不自由を感ぜぬ。唯和服を着て外出してる者は一人も見當らない。

金と花の兩天秤

羅府は常春の都だ、寒からず暑からず、空は紺青、地は花もみぢ羅府は黃金の都だ。油泉あり、フイルム製造所あり、オレンヂ畑あり、羅府は株の都だ。企業と投機の盛んなる他に比儔を見ない。一七八一年スペイン人が開いた町だが、一九〇〇年には二十萬、今は百二十五萬に激增し、その急激な發展は想像も及ばぬ。

市の當局は世界の中心が、太平洋に移るべき將來を見越し、その又中心たるべく大都計畫を樹て、大馬力をかけてこれを實現してる。

郊外の坦々たる道路、整然たる區劃、さすがに黃金湧く國は違つたものだ。十五年前、佐藤君の住宅は市の東端であつたが、今は眞中になつて了つた。五十年の後、東京と上海と羅府の三角關係が見ものであらう。

× × ×

羅府の野菜市場は名物の一、田舍の日本人農夫が、野菜を自動車に滿載してこゝに搬入し、午後十時に開市午前一時に閉づる。その取引の盛んなる、名狀の辭に苦しむ。廣大なる市場は、同胞の共同經營に係はるものである。抑々カリフオルニアに於ける野菜農業は日本人の獨占事業だ。白人の粗放的な耕作では迚も對抗が出來ないのだらう。排日法實施の結果、一般需要者の最も恐るゝのは、野菜供給に一大頓挫を來すことであるいかなる排日者でも糧道を斷たれては、たまつたものでない。必要な野菜の產額が減じおまけに恐るべき同胞勞働者が都市に集中したならば、一擧兩失の愚策といふものだ。

ブルジョーアのパサデナ

十八日、メキシコ領事館にて査證を受けてから、リンコルン公園の芝生に昨夜市場で格安に仕入れたメロンとおすしを掘げて、ピクニックをうまし、富豪の住宅街、パサデナへとドライヴした。小高い丘上の數奇をこらしたヴイラ、手入の行屆いた庭園は、黃金の湧く國なればこそと思はしめた。離に匂ふ薔薇に菊、眞靑な芝生に散るリンデの紅葉、嫋々と軟風に梳るペッパーの絲など、この世ながらの天國である。

富豪の贅澤振りは、日本のなどとは桁が違つて比較にならぬ。しかし何等怨嗟の聲を聞かないのは生活難がないからだ。働けば生きて行けるからだ。根氣よくやれば誰でも富豪になれるからだ。結局資源が豐富だからである。

何んといふ天惠豐かな國だらうカも勿論大羅府の一部である。

日がトップリ暮れて電光の輝かしい海岸通に出た。太西洋とは打

メキシコ領へ

十九日午前六時、ロスアンジエルス出發、坦々たるアスファルト道を南下して、メキシコの國境へと急ぐ。今日の道程サンデーゴまで百四十哩、サンデーゴよりメキシコのチアナまで十八哩、合計百五十八哩、往復三百十六哩。

ロスアンジエルスの郊外から柑橘や胡桃や柿の畑が續く、丁度橘の花盛りで、芳香にむせる許り、かと思うと片方には密柑や柿が赤く熟してる、四季のけぢめは少しもない。沿道新しい町がドシ〳〵膨れて往く。何れも先づ道路を造り、上水下水の設備を整へて建築を待つてゐる。殊に海岸別莊地の發展振りは非常なものだ。南下するに從つて廣漠たる未墾地が現はれる、天幕を張り自動開墾機で、開墾を始めてる白人農夫を見受ける。土は眞黑く肥料などは要らぬ何といふ天惠のゆたかな國だらう

正午サンデーゴロに着く、綺麗な市だ。こゝは太平洋艦隊の根據地で、飛行機が飛んだり、軍艦が

京城雜筆

烟を吐いたり、何となく物騷だ。日本めし屋にて晝食する。

紀州辯のおかみさんから、邦人漁師で賑ふ頃の面白い話を聞く。海岸傳へに南下を續ける。何所まで往つても、自動車の往來繊るが如しだ。國境にて米墨兩國の檢査を受け、水の濁れた川を渡つてチアナの町に着いたのは、午後二時

× × ×

チアナは小さな町、見る價値がありとすれば、酒場に賭博場に女郎屋である。全町悉くがさうだとも言ひ得る。酒場には間口一丁半もあるのがある、日中でも踊つてる馬鹿者がゐる。ダンスも少からず下卑てゐる。女郎屋は公道に面し、一軒に三四人乃至七八人頭を揃へて、ガラス窓越しに連りに目くばせをしてゐる。

一體こゝに押しかける奴はといへば、言ふまでもなく米國人だ。禁酒國では、よしんば飲めるにしても窮屈であるから、皆自動車を飛ばして、公然と放埒の限りを盡す。この意味に於て墨國の存在は彼れには有り難いものだらう。

× × ×

墨國の山河風物如何？國境を覗いた丈では分る筈がないけれども加州の連續であるから、實質に於て大差はないだらうか、著しく文化の程度が低いのと、内亂の頻發に依り國内の開發が、等閑に附せられてるので、殆んど人工的美の見るべきものなく、一見甚だ荒凉の感を與へる。土民の家屋の貧弱なる、その服裝の粗末なる、道路の不完全なる、耕作の粗放なる、一として文明國の表徵たるべきものがない。もしこゝに、勤勉なる移民を植え、資本を投下したならば、必ず面目一新するであらう。米國移民の絶望的なる今日、墨國政府は我移民を歓迎してゐる今日機會を失せず對策を講じる必要があるではないか。

對策といつて面倒はない、低利の資金を融通して、今の中にウント安い土地を手に入れて置くことだ。ドンナことがあつても損する氣遣ひはない、マゴ〳〵してるとこゝも亦名實共に米國のものになる時が來るだらう。今の中だ。この今が再び來ない。

午後三時、チアナを出發し、百哩を餘まして、夕陽は熱帶の海に落ちた。心細い三日目が懸つてるけれども、何の役にも立たぬ。大星の爛々たる光芒も駄目だ。

これから眞闇の中を三十哩の速力で走る。危險此上ない。砂地に落込んで自由を失つたり、疲れ果てた揚句、迂回をしたりして、走ること三百五十哩、漸く午後十二時、ロスアンジェルスに歸つた。

ロングベーチ行

明けて二十日、佐藤君は三百五十哩に疲れた色もなく、ロングベーチへドライヴしようといふ。ドライヴはモー澤山と洒げてもイツかな承知せぬ、滯在の短期間に、見物の最大效率をあげしめようとする親切からだ。

ロスアンジェルスの郊外に出ると、同胞の野菜園がある。水を灌ぐもの、箱詰めにするもの、自動車に積むもの、中々に忙はしい。左程見苦しからぬ農家が點々してる。腕白盛りの子供が遊んでゐるハローと聲かけるとハローと答ふ彼等は生れながらにして米國市民權を有つてゐるから、法律上排斥される危險はあるまい。

同胞の果物屋でバナ、を買込み血色のイ、新夫婦に道をきく。この邊一帶石油噴井の櫓が、文字通り林立してゐる。その數二千を突破するといふ。井戸一本から二十四時間に平均セメント樽にて八千樽湧出する。井戸の深さ約二千四百呎、これが掘鑿費約八萬弗を要する。

多くは株式會社の經營に係り、土地所有者には湧出額の三分の一を分配するといふ。

土を掘れば、一日八千樽の石油が湧くのだからたまらぬ、町だらうが、海の中だらうが、所選ばず櫓を立てたものだ。

ロングビーチ市銀行には全南加の三分の一の金が集まると言はれてるが、これは大部分石油の代金だそうな。市内をドライヴして海岸の娯樂場を一巡した。サンタモニカやヴェニスなどと同じことだ歸途佐藤君の投資してる井戸を見る、これほど虫のイ、企業は又とあるまい。

せめてこの十分の一でも、日本にあつたならばと思つても及ばぬことだ。

◈世間ばなし

吉田莊一

◎土佐紙支店長の中内さん、旅行の時は屹度本誌を鞄の中に入れて行く。この間も旅から歸つて、『君、今村さんのちり蓮華を讀んだがあれはステキだね』

◎釘本樂器店の鶴田さん、早稻田の出身で、文藝趣味の豐かな人一管の尺八をとつては、この半島に並ぶものゝない名手だと。

人ちがひ

瀬戸潔

一

一學生某寄宿舍に友人を訪ふて應接間兼談話室の樣な所で三四人火鉢を圍み雜談に耽つてる。新來者が來た、客の學生の方を見て挨拶をするが、客の學生は相手にならうともせず話を續けてるので新來者は怒り出した『何だ君は挨拶も受けず横向くとは失敬じやないか』寄宿生の一人『馬鹿云ふな、君は瀨戸と人違してるのだらう、之は瀨戸の弟だ』新來者『ソーか〳〵』此新來者は僕の友人。

二

學生某其兄貴を高等學校の寄宿に訪ふ、廊下にて會ひし人に『只今某は室に居りますでせうか』と聞く、相手の學生はツク〳〵訪問者の顏を見て突然憤顏をポカリ『馬鹿な事するなよ』……擲つたのは氣早な同室學生、擲られたのは其弟。

三

某博士の書生時代藝人某と好い仲になつてるとの噂があつたが、友人間には之を否定して居た。

或日の事電燈のつく頃友人A君が散歩に出かけた所、博士君噂の女と手に手を取つてピッタリと肩を押し合つてA君の前に顯はれ出た。A君玆だと許り忍足で追かけ、雙聲を擧げると同時に兩手で二人の背を同時に思ひ切りドヤした。兩人はビックリ仰天……後で見ると全く未知の、しかも新婚者らしかつたので、A君逃げ出した。

四

元山停車場員夜中舊同窓が來ると云ふのでH君寢臺車に入りボーイ君にY氏の室を聞く、其室に入るとY氏がよく眠つてるではないか。『オーイ、モー元山だよ』ユリ起して色々話して見ると所々話の合點の行かざる處があるのでよく聞くとY氏はY氏だが全くの人違ひ、尋ねたY氏は其時停車場を出てH君の宅を訪ふて居たのだつた。

法津小話

中島長作

人格

普天の下王土に非ざる莫く率土の濱王臣に非ざる莫し。

法は公平且普遍的に吾人を支配す、民法は私權の享有は出生に始まると規定して何人も人間たる以上總ての權利の主體たることを認めて居る。而し具體的な社會を見ると金持の子は生れ乍らにして巨萬の財産を與へられ飽食暖衣して厭く所を知らざるに反し、乞食の子は其生命の糧たるべき一片のパン、其身體を保護すべき一枚の木綿着さへ與へられない。是は勿論人間の偶然的な幸不幸に基因するもので現代の社會としては免るべからざることとしても、生れ出たる人格としての價値には何等の差異なき筈なるに、現代の社會は金持の子に對してのみあらゆる美辭麗句、贊辭、敬語を濫用して人格として絶對の優越感を以て待遇するに、乞食の子は常に乞食の子として社會から排斥され卑められる是れ現代社會があまりにも物質本位に墮したるの罪にあらざるなきか。然れども社會よ記憶せよ乞食の子と雖も未來永劫乞食として其生涯を終るものにあらざる事を。

公序良俗

古今東西を問はず社會には色々なる思想が流行するものである。併し是等の内で其時代の大多數者を支配し得て誤りなき公正なる權威あるものがあらねばならぬ。是を時代思想と謂ひ、此思想の中核を爲すものを時代精神と謂ひ此時代精神に適合せる行爲は其時代に於て是を社會的に見て正義と謂ひ得る。

法律の解釋適用も亦此時代精神に從はねばならぬ事は勿論である民法は公序良俗に違反する法律上の行爲は無效とすと規定して居る此語は民法の内で最も社會的の意義あり社會的效用を爲すものである、公序良俗とは即ち時代精神に最も適合する事を謂ふ。

吾人の生活を規律する法律を作るには立法者は實質的に充分なる研究を要するは勿論、形式的には樞密院の御諮詢とか議會の協賛とか天皇の御裁可とか、重大なる手續を要し朝令暮改式に改廢する譯には行かない。

故に重要なる法律は少くとも二三十年の壽命を有し得る、併し社會は進化の理法に依って毎日進歩發達し十年一昔の諺に漏れず社會事情は一變する、昔し立法者が頭を惱ました立派な法律も、遠く社會から取殘されて時代に適應せないことになる、即ち停止せる法律と進化せる社會とを調和することこそ此公序良俗撰言すれば時代精神的解釋の大使命である。裁判官は此伸縮自在なる規定によりて所謂法律善を社會に實行して行く。

【三〇】

即ち公正なる時代精神に適應すべく法律を適用する、依りて以て法律と進化せる時代とは充分調和される。

所有權

物質は吾人の經濟本能の第一要素をなす、所有權は物を絶對的に使用し收益し處分することを得べき權能なり、故に所有者は自己の欲する儘に物の經濟的價値を生活上獨專し得る。所有權制度は吾人の生活が物質を離れて想像する事を得ざる以上永遠に認めざるべからざる制度にて、彼のデモクラシー學說の金科玉條とする共産制度の如きは全く痴人の夢に過ぎない

而し現在の所有權の絶對權能を社會進化の理想に適合すべく立法的に或は司法的に或は社會意識的に制限し調和するの必要なきや否や、吾人が國家なる社會を形成して幸福なる生活を希望する以上何物をも其幸福に適應せしめざるべからざるは勿論なり、所有權に付きても亦然り、所謂所有權を社會化するの必要は現代の有識階級者の等しく熟考すべきではあるまいか。警世の鐘鳴る、資本家目覺めよ、地主熟考せよ、其他有産階級者目覺めよ、而して各自に有する所有權の完全權能の一部を割愛して勞働者に與へよ、小作人に與へよ、借家人に與へよ、而して反省せよ、己の喪ふ所のもの如何に僅少にして其效果の如何に社會的に有意義なるかを、如斯所有權の社會的利導に依りて現代の病體的社會の一大病源たる階級意識を緩和し得て憂ふべき各種爭議を或る程度迄防止せば社會は平和に治國平天下の理想鄉の出現も敢て遠きにあらざるの希望を生ぜん。

所有權の社會化亦意義ある哉。

なる思想が流行するものである。
併し是等の内で其時代の大多數者を支配し得て誤りなき公正なる

神的解釋の下に自在なる規定によりて所謂法律善を社會に實行して行く。
は此伸縮自在なる規定によりて所

あらざるの希望を生ぜん。
所有權の社會化亦意義ある哉。

京城雜筆

内地をめぐる

飯泉幹太

仙臺から

ズー〳〵辯と輕蔑するも純朴にして親切、大正の政宗、政岡は亦このズー〳〵國より生るゝにあらざる乎（三月廿九日仙臺ホテルにて）

淺虫溫泉

當地には東北稀に見る設備完全の溫泉旅館あり、昨日より風波荒く、本日北海道に向ふも海上不穩なり（三月三十一日淺虫溫泉東奥館にて）

登別溫泉

北海道第一の稱ある當地に來り舊友と十七年振りに相會し痛飲追分節を聽く。

國をはなれて蝦夷地の土地へ、行くよねざめの浪枕、ヤンサノヘ、蝦夷地よいとこ、今年も大漁でネ、とれし鰊は銀光り（四月一日登別溫泉第一瀧本にて）

夕張町から

孫見と溫泉巡くりで英氣はます〳〵加はりました。

當地は海拔二千尺、毎日雪降り今猶積雪丈餘に及び春氣分更になし、夫れでも雪解けで道路は泥海の如く北海道第一の不潔季節なり

孫はまる〳〵とふとりて可愛い事此上なし、此所數日間娘夫婦や孫と浮世を離れた面白い話で愉快に暮しました。

明朝出發秋田、新潟美人國の情調を味ひ歸京の豫定（四月七日北海道夕張町に於て）

四日雪中馬橇を驅つて『ふもんけ』の吉田牧場を訪ね、名馬が北風に嘶き勇む豪壯を見ました

當地炭坑は組織設備完整、なか〳〵有望なり。

札幌から

街衢井然を誇る當地も昨今は雪解けで見る影もありません。

當地で未見の親戚を訪ねました是れと云ふて學問はありませんがクリスチャンで眞面目で、極めて盛大に機械工場を經營しております。工場の要部は子又は孫で固め而かも何れも基敎信者で親切なるため、工場爭議などは更に起りませんばかりか和氣靄々として樂しく皆勢を出して働いて居ります。

而して一言毎にお秀さん〳〵と亡妻の名を云はれるのでトウ〳〵嬉しく泣されました。

當地帝大敎授に舊友三四ありまして三十年前の昔に返つて愉快に懷舊談を試みました（四月九日札幌山形屋にて）

湯の川から

雪解けの不潔と黑ずんだ積雪に目慣れて居つたが此所は雪もなく多少春氣分が朋し居り氣がのび〳〵しました、夫れに田舍に珍らしい程設備整ひ室も小蔭張として女中も上品で、身裝で差別する事なく宿泊料表を提出して客の指圖によつて待遇し、おまけに短册に奇麗に宿屋專業ですから藝者を揚げる事は絶對に御斷り申上げますと書いて掛けてありますのが大變氣に入りました、之れは北海道の溫泉宿は料理屋を兼營し居るが當館は專業の宿屋なので助平客に對するうまい豫防策と存じました。

北海道の北海岸は目下鰊の豐漁で大景氣です（四月十日湯の川溫泉福井館にて）

秋田から

流石は美人國だけに往來の婦人にも美人多し、只其言葉を聞いては百年の戀もサメる程妙な發者で而かも薩張判りません（四月十二日秋田小林旅館にて）

車中にて

秋田新潟線はなか〳〵勝地に富んで居ります、わけて小砂川、吹浦間最もよろしい樣に存じました

新潟を見物しましたが開港場として最も振はぬ地、所謂新潟美人なるものを除けばホントウに零でせうと存じました（四月十三日新潟郡山間車中）

塩原溫泉

北海道の孫見、北國美人の探險を終り、本日宇都宮にある長女を慰安すべく同伴當地に來る、降雪寒氣强く都人士は櫻に浮かれ居るため一人の浴客無く、頗る休養に適せり（四月十四日塩原溫泉松屋別館）

淡朦錄

開教院　伊政博中

朦々而三十年、淡々而三十年
朦々淡々六十年、糞を捧つて梵天に捧ぐる處まで行つた一休も朦々としての三十年は免れなかつたと見える。況や凡人、朦々の幾十年はあるか知れない。僕は禪僧でないから敢て一休を學ばうとはしないが、朦々の三十年はモー過ぎ去つた。後三十年は淡朦の記錄に終れば結構なり。大概已れの一生に見切りも附け處此處一番書いて見る拙者の隨筆、これを淡朦錄とは申します。

○

按摩が笛吹きや客から呼ばれる笛で知らして默つて揉むのが按摩の商買、道を得て然かりと謂ふ可きだ。聲で知らして按摩も出來ぬ——聲丈けの教育、口先きの說教——肩の凝らぬ上手さはあつても功果はない。

○

さうぢや〳〵と謂つて話を打ち切つたが、俺の肚の中には米の磨ぎ汁と牛乳とがゴッチャになつてトボケタ味を嚙み分ける丈けの分別はなかつた。

○

明石の人麿神社に詣つて驚いた人麿は歌聖なり。歌人文人の參るを不思議とはせぬ。何ぞ圖らん產婦の安產祈り、或は亦火難消除の祈願をする。矢張り髑の頭も信仰からと、そんな事實を肯定の出來ない私、嬉祠邪敎の本尊の暴露は到る處にある。健全な國民宗敎の爲めに快哉を叫ぶもの、今知つて默然とは出來ぬ。さりとて今更らに神の戸籍調べも野暮な事、迷惑千萬なその日の夕方、宿に歸つて思案に暮れた。神話や傳說に基く宗敎は低級なものに定つて居るが未開の民にはそれがそのまゝ權威であつたのだから不思議はないとしても、宗敎發達の過程を見るに進んだ宗敎の中にも隨義轉用と謂つたやうな事がまゝ含まれて居る低級になればなる程、轉化轉用は寧ろ滑稽と謂ふの外はない。人麿を火避けの神、子安地藏と間違へたのもその類に過ぎない事が分つた。音が傳へた誤りか。拈ねつた頭のいたづらか、どうせ似而非者の造つた仕事であらふ。人麿は音でヒトマル卽ち人生ると轉化したのが子授け安產の神なり、またヒトマルは火止るともなるので、それに轉化したものは火避けの神を造つたのである。歌聖人麿樣も御迷惑な事、今日では歌の神樣の外に消防の親方、產婆の隊長までつとめねばならぬとは誠に世智辛い世の中、神樣までが縮少主義を唱へて受持の仕事を多くしたとはチト變に聞えるではないか。

○

スケレトンと謂へば唄の囃しにでもありさうな表音語の一種か。

【三二】

さもなくんばチョコマン節の茶目振りを思ひ出す。何れにしても滑稽な響きのする語呂だが、何の事だと思つて居たら英語の骸骨で、それが轉化して武骨漢を呼ぶ語だと謂ふ。なる程肉のある中は色氣もある。骸骨になれば木石と同然武骨漢にも色氣は少ない。それを晒落れた人からは反つて滑稽に見えるであらう。そんな事とは知らずして武骨な俺までがスケレトン(Skeleton)を滑稽な事に思つて居たと或る學生の話。

◇素明氏の事

吉田莊一

◎鮮展日本畫の審査員は結城素明氏と決定したが、氏とこの前の審査員平福百穗氏との間には、畫界でも有名な美談がある。

◎といふは、平福氏は學生時代大變な貧困で、蓬頭垢面『ヤツのそばへ寄ると、臭くて不可ん』とまで、同窓生から爪彈きされたものだ。

◎結城氏は、深川の大きい酒問屋のムスコさんで、痛く平福氏に同情し、兩親に乞ふて我家へ引取り、氏の卒業まで、總ての面倒を見たのみか、平福氏が業成つて故郷へ歸る時は、其土產から紋服まで、總て結城家で心配したものだ

◎尙ほ平福氏は、再び京に上りその獨立し得るまで、やはり素明氏宅に寄寓してゐた。

◎これで結城氏といふ人の人柄は凡そわかるだらう。もとより生粹の江戸ッ兒で、あまりシャベル人ではないが、腹は洗つたやうにキレイな人だ……。

◎そして亦た默々牛のやうに、敢て恩に着ない處も平福式……。

婦の安産祈り、或は赤火難消除の祈願をする。矢張り鰯の頭も信仰からと、そんな事實を肯定の出來

○

スケレトンと謂へば唄の囃しにでもありさうな表音語の一種か。

キレイな人が

◎そして亦た默々牛のやうに、敢て恩に着ない處も平福式……。

「人生の幸福は健康より」とか申します

眞に幸福なる方は　常に　明晰なる頭腦と　强健なる肉體との所有者であらねばなりません。此の『神心獸體』を得るに色々の手段方法もありませうが、私は皆樣に　我『朝鮮總督府專賣局製の蔘精』を　御常用遊ばすやう御勸め致します。

御承知の如く古來人蔘は　萬病に靈効ありと稱せられ、支那人の如きは瀕死の病人に投ずる　唯一の回春劑として珍重したものでありますが、泰西文明の奔入のため　一時輕視されましたが　最近內外の學者の研究する所となり、其の神秘的効果に就ては　等しく言を盡して　激賞してゐる次第であります。

近時　强壯劑又は滋養劑として發賣せらるゝもの　日と伴に激增し、皆等しく科學的名稱を附して、喧傳に努めて居りまして、全く一に新藥　二に新藥と所謂新藥は一般の視聽を惹いてゐるやうで御座いますが、此等の新藥の多くは皆　同質異名のものに過ぎず、その効果の點に於ても尙研究の餘地あるものが多い有樣で御座います。

然るに人蔘劑は御存じの通り　數千年の歷史を有する　靈藥でありまして、その効果は此の永い年月の間に　充分確證されて來ました、又特効あればこそ　數千年後の今日まで靈藥として　傳はつたものだらうと存じます。唯最近　不正商人の跋扈により不正　又は劣等品の發賣されました爲め　人蔘劑の効果に疑問を差し挾まるゝ方も多少御座いますやう承ります、然るに我が總督府が　多年苦心研究の結果　精製するを得ました『蔘精』は流石政府の製品たる名に恥ぢず、巷間に普通『人蔘エキス』と稱せらるゝ品物と同日の談ではありません。弊堂は先年來　總督府の御指命により此の蔘精は大方の皆樣に御紹介するの榮を得ましてより　日尙淺きに拘らず　近時遽かに其の眞價を認められ　大變な高評を博する樣になりましたが、何分製產高　至極僅少でありました爲め　充分皆樣の御需要を滿たす能はざる關係上　或は未だ御試用洩れの御方も多々ありませうと存じます。御承知の通り一般に藥は必ず　何處で製造されたものか、御買求めになる方は其の藥の　身許調査をなさる事が一番肝要であります。で　之れまで未だ　蔘精をお試しにならない方又は從來巷間に販賣する　不正品乃至は劣等品の爲め　惱まされた御經驗のある方に是非　此の政府の製造に係る蔘精を御勸め致します。

右の次第で御座いますから　從來往々民間に取扱つて居ります樣に　割引とか景品付とかの山師的販賣は致し兼ねます。唯不正品の爲め　兎角その光を妨げられ勝の狀態に在ります官製蔘精の眞價を　如何にして汎く御紹介出來得るかに沒頭してゐる次第でありまして、常に政府の方とも協議の上　精々製品の純良と價格の底廉とを期して居ります。是非一度御試し下さいまして　一日も早く御健康と御幸福とを得られます樣御願ひ致します。

蔘精の榮御申越次第無代進呈致します

元賣捌所　朝鮮總督府蔘精

貴生堂店主

京城本町二丁目

電本一三八番振替京城七六一番

白敬

茶と茶器と
は青々園へ
青々園茶舗
京城本町二丁目

市内明治町二丁目
内科
小兒科
中島病院
院長 中島貞信

西洋料理
支那料理
東京へお出での節はどうぞお立寄りください
東京芝區新櫻田町一七
泰明軒

市内永樂町二丁目
木戸齒科醫院
院長 木戸虎藏

市内明治町二ノ七五
利根川齒料醫院
院長 利根川清治郎

市内旭丁二丁目
外科
皮膚科
瀬戸病院
院長 瀬戸潔

市内鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

人生の幸福は健康より
建康それは蔘精の服用によつて解決します明日と云わず今日から而して人生の幸に向つて
（定價内用二十瓦入壹圓五十錢）
京城本町二丁目
總督府蔘精發賣元
貴生堂藥品店
電話本局一三八
振替京城七六一

高級
京染
（新柄見本到著）
京城本町三丁目
まらぎ屋
電本三〇六八
振京五八三

市内吉野町一丁目
内科
小兒科
木村醫院
電話本局七二五

既製品が澤山あります

春向背廣服

バーオ

トーコンイレ

新地質續々到着いたしました

仕立は念入り價格は安い

京城鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

御注文で特製致します

人に希ふ、斯る我輩に寄贈して下さる御仁はありませんか。其代り成切すれば寄職員でも、魅爲員で

一山百文

内田竹三郎

○乾坤開闢以來、京城雜筆社から原稿をと云はれたのは今度が始めて、夫れで無くつてさい書きたくつてならぬ、我輩の閑寂。カシコマリ奉ると、一山百文を草す。

○未だ拜眉の榮を得ず候へ共だ永樂町人先生程、我儘の人はないなと常に思つて居る。雜筆施行細則第四條に云ふ、本誌に投稿すべき寄稿家は、須らく戸籍謄本に基く氏名を掲くべし、而して俺は永樂町人でよい、との人民扱さ加減

○我輩は我輩を指して常に、タワイのない奴だと自嘲を禁ずるを得ぬ。よい齡をしてさ、此狹い京城を自働車でソツクリ返つて見たく思ふ。シルクハットでも被つて木猴冠の眞似を羨しく思ふ。第二席第三次側に並列すべし、などの張札順にプラットホームの陳列員にもなつて見たい樣な氣もする。

○況んや學校組合屋僚員、商業會議所號委員などにもなつて、葉書大の名刺でも振舞はしたら、ドヂヤロかなどとも考へる。

○或は亦、茲に二百萬圓ばかりの端タ金があれば、年八分としても十六萬圓。之をソレ宴會、ソレ寄附、ソレぽち、ソレ何と甘くバラ播けば三日とたゝぬ内に忽ち大紳士、大交際家、大義俠家、話せる、判る、豪い、見上げたなど讃辭に食傷する程、重厚の京城だから、屁もなく朝鮮一流のアタマンと崇められて、ヤレ總督の晩餐會軍司令官の披露會、曰く何、曰く……で以て、有頂天になれるダンベと本氣に考へる。

○更に亦、朝鮮なんて、形式萬能、小旗本の小家庭見たいに、下は巡査看守級から、總監總督級迄何十等からある階級差別に規矩せられて、貴公の公職は何んですかなど水平扱に躊躇するより、幾分文明化したらしき、日本と云ふチツポケな蝸牛嶋に本封返りして、珍品伯、アノノー男、金魚總裁、嘘つき總理輩の仲間入りして、天下てふものを嶺篆するも亦男子の本懷などとも考へる。

○夫れにはタツタ五千萬圓もあれば十二分だ。年六分と見て終身年収三百萬圓。我未見の友田中義一君は、此五千萬圓の一年分の糟粕の爲め、ドレ位イヤな思ひをさせられてる事や全く同情の感に堪へぬ。滿天下の政治を商賣とする御諸君方、我輩が茲に卽金五千萬圓を携帶して名乘を擧げたら何と召さるると妄念に熱中して居る。

○更にも一つ十億の金があつたら支那に歸化して、支那を統一して見ようかなどとの誇大妄想、葦原將軍の弟子見たいな事も、チヨク〳〵研究して居る。畢竟金にして人に非らず。智慮に非らずして黃金なり矣だ。大の方なれば十億小口なれば二百萬圓。世の縉紳義人に希ふ、斯る我輩に寄贈して下さる御仁はありませんか。其代り成切すれば寄賊員でも、醜僞員でも、御望み次第にして上げます。

○なんかんと考へて居ると、斯のイヤな塵世にコダハラズに、すら〳〵と光陰を空費することが出來る。下らぬ人生を離離せずに、超越することが容易である。榮譽だとか、勳勞などと持て囃せど、詮じ詰むれば、寄席の下足札と等しく、先に這入つた者が『いの一號』ビリに駈つけたものが『すの百號』と云ふだけ。先に生れたから先生、年が若いから後進。二年經ては三つになるのは、釋迦も盜跖も變りはないのが宇宙の平等。醫者代、養生代、看護手當に何不足なき所謂有爲の人物でも、コロリと死ねば、持餘しの破漢戸が叩殺しても死なぬと云ふのが運命と云ふ飄輕者。

◈聞くがまゝ

平田久雄

◎殖銀の矢鍋さん、ゴルフは第一期修業生だが、これまで曾て優勝戰に出たことはない。

◎『どうして參加しないんですか』といふと、『日曜は前々から子供と遊ぶことにキメてゐるからね……』そして笑うて曰く『自信がないから敵にウシロを見せるのとはワケが違ふよ』

◎專賣局の『專賣通報』に、白雨の名前で、頻りに美文を草する人がある。評判になつてゐる。白雨とは誰ですかといふと、『白雨を知らんですか、アンタも迂遠ですね、高武さんですヨ……』に、ハハーン、なーる。

京城雜筆

話

飯嶋滋次郎

蔦の絡んだ石鎖を渡ると雨が降つてきた。私は正殿の石段を駈けあがつて、古ぼけた朱の柱の傍に立つた。舊式な大砲が一門陳列してあつたが、もう武器の精神は失くなしてゐるので、標尺を五尺と離れてゐないひよろ〳〵と枯れた櫻の胴に向けてゐた。

砲身を撫でながら、私はぼんやり雨の停むのを待つてゐたが、雨脚はだん〴〵烈しくなつて、午後間もないのにあたり一面薄墨にぼかされて行つた。

こんな雨降りの日には參觀人もないと思つたのか、非番なのか、巡視が濡れそぼれて一人肩をすぼめながら、黄色に枯れた廣い芝地を横ぎつて行つた。

私は夫を眺めてゐると氣が滅入つてしまつたので、久振りで何處の博物館にも陳列してある鯨骨とか、隕石とか、小供の時分に有頂天になつて喜んだものを見物して雨が霽れたら歸らうと思つた。濕ぽい廊下を通つて天井の低い部屋に這入つたが、其處は博物の部門ではなく、青龍白虎と金絲で刺繍はしてあるが、ボロ〳〵の旗が幾流も壁にかけてあつた。部屋の眞中のガラス箱の裡には、黑檀の柄の青龍刀が陳列してあつた。刀身から鈍い燐白色の光を放つてゐた

いつもなら、此處にも參觀人が立つてゐるだらうが、何人もゐなかつた。太い銀鎖を胸にぶらさげて實直に靴を鳴して歩く筈の巡視も姿を見せなかつた。ざあ〳〵と雨の音を聞きながら、獨りでこんな人間情熱の遺物を眺めてゐると薄氣味悪くなつた。猿のやうに齒をむき出してこの青龍刀を閃めかした男がゐたんだろう。もつともそんな男の骨は何處かの藪かげに轉がつてゐるかも知れない。雨は小降りになつたらしかつたが風が柳の葉をひどくガラス窓に吹つけてゐた。

弱い咳が二度ばかり隣の部屋に聞えた。私は空想から引戻されたが、何かなしに寒氣がした。懷中から手帖を出すとピシヤ〳〵叩きながら、わざと肩を聳かすやうにして敷居を踏んだ。

部屋の隅に朝鮮人の巡視が腰かけてゐた。薄痘面の年配の男だつたが、私が這入つて來ても鷄が卵を抱いてゐるやうな姿勢をしてゐた。腕を組んだまゝ机に靠れて、白目の多い眼をヂツとして身動きもしなかつた。私は默つて通抜けやうとしたが、つい馴れ〳〵しく云つて了つた。

『こんな雨の日には淋しいでせうね』

『淋シイデス、雨ノ日ニハ困リマス』

『それで永く此處に勤めてゐるのですか』

〔三八〕

『ハイ、昔カラ此處デ座ツテキマス』

こんな切口上を彼は嗄聲だつたが、變に底力のある聲で云つた。アンリ・コットル風に似た髯を扱きながら、私の顏を眺めてゐるので、いつか豫言者とその弟子みたいになつて了つた。私はスウと吐く息をなるべく我慢してゐた。其男は首を傾けて考へてゐるやうだつたが、突然に云つた。

『アナタノ運勢ヲ觀テアゲマセウ、此處ニオ座リナサイ』

圓い腰掛を押しやつたので、私は滑稽な顏でもして重苦しい空氣を攪亂してやろうと思つたが、引摺られるやうに座つて了つた。

『アナタノ生レタノハ晝デスカ夜デスカ、鷄ガナキマシタカ』

『そりや解りません。私は町で生れたのですから鷄なんかゐません。電車が朝から晩まで通つてゐます。

『ソレハ困リマシタ』

あまり意外な質問だつたので皮肉の積りで云つたのだが、その男は平氣な顏して今度は指を折つて何か算へてゐるやうだつた。私の顏を偸み見て口の中で呟いてゐたが、やがて鉛筆を嘗めては手帖に丁寧に書いた。

『雁行二三山高月小、貴下ノ兄弟ハ二三人デセウ、オ母サンハオ父サンヨリ早ク死ニマシタ』

『なるほど』

私はまさかと思つた。智慧の輪を苦もなく解かれた位に驚いた。

『ソンナ事ハ容易イデス、私ハマダ富貴ト長命ノ術ヲ知ツテキマス。嘘ヂヤアリマセン、鷄ノ血ニ金粉ヲ交ゼテ飲ムト富者ニナレマス』

晝間でも薄暗いがらんとした部

屋でこんな話を聽くのは氣味が悪いが、その話より男の樣子が恐ろ

Sは一寸考へるやうだつた。琥珀のパイプに兩切を器用な手つき

山の兵營の喇叭がよく聞へるんです。夜の喇叭は陰氣な聯想を

から鈍い燈色の光を放つてゐた。

いつもなら、此處にも參觀人が立つてゐるだらうが、何人もゐな

『それで永く此處に勤めてゐるのですか』

ナレマス』

晝間でも薄暗いがらんとした部屋でこんな話を聽くのは氣味が悪いが、その話より男の樣子が恐ろしかつたのだ。石佛だの古墳の斷片と向合つて、默つて暮してゐる男は、觀念が固定して何時の間にか狂人に成つてゐるかも知れない。岩蔭に潛んだ鱶が、突然に無邪氣に游ぐ魚でも嚙みつくやうに其邊に轉がつてゐる石斧でグワンと頭を打たれたら、それきりだと思つた。私は用心しながら入口の方を見ると、黃色い薄日が射してゐた。暫くすると閉館を知らせる勢のいゝ鐘の音が遠くから殷々近づいて來たので安心したやうな氣がした。

※　※　※

二三日續つた晩である、私は友人のSの下宿を訪ねた。八疊の部屋に高い樫の書棚が立てゝあつた積込まれた厚い洋書の金文字は槍を立連らねた騎士のやうに嚴然と光つてゐたが、一閑張の机の上には無造作に綴ぢたフールス・キアップ、吸ひかけの葉卷、鑵詰などが雜然と乘せてあつた。

『や、これは失禮』

Sは障子を開けると勢よく云つた。湯上りに血色のいゝ顏を撫でながら襖戸の火鉢を押した。

『變つた話はありませんか』

普通の人が『どうです』と挨拶する所を、そんな風にいつたのは職業によつてめい〳〵切口上があるから、Sの場合にも、醫者だから患者に會えば『お變りありませんか』と云ふのが口癖になつて、そう尋ねたかも知れない。

『うん、ある』

私もすら〳〵と答へた。『朝鮮人から教はつたのだが、鷄の生血に金粉を交ぜて飲むと、長生きして金持ちになるそうだ』

Sは一寸考へるやうだつた。琥珀のパイプに兩切を器用な手つきで差込みながら、

『そりや君魔術だよ。——交感魔法と云つてね、近代科學が發達する前の人は、萬物には滿那が瀰漫してゐると思つてゐたのです、對象物のマンナを支配のすれば自分の望が達せられる。夫には物眞似をやるんです。雨乞ひには地面に水を撒くんです風乞ひには笛を吹くんです。憎い男を苦しめるには藁人形を磔刑にするのです。いやその迷信は醫學の方にもあります。黃疸に鬱金香をやつたり、頭痛に芥子粒を飲ませるのは、つまり色が似てゐたり、粒が人間の頭に似てゐるからです。いやこれは飛んだ講義を初めてしまつた』

彼れは笑いながら鑵詰を膝にのせた。

『その鑵詰はなにかね』

『西洋梨なんだか……』

彼は俯きなから厚いブリキを切てゐた。

『西洋梨か、僕のゐた家の庭に西洋梨の樹が一本あつたが、食つてやろうと思ふうちに、靑いくせに落ちるんで……』

『君のさつきの鷄の血の話ね』

Sは鑵切を拋げると遮るやうに云つた——

『あの話ですつかり解つた。なにしろ此處へ來たばかりだつたから。話そう、いやまて、梨を食つてからだ』

彼は女中を呼んで皿と楊子を取寄せた、私は飴色した梨を一切味はつた。彼は煙草を吹かしてゐたが、やがて話を初めた。

『僕がこゝに來たてには南山の裏にゐたんだが、夜になると龍山の兵營の喇叭がよく聞へるんです。夜の喇叭は陰氣な聯想を起すのでフランス敎會の崖の下に轉宿したのです。窓を開けると崖の草叢に赤い實なんか見えて、首を傾けると鐘が覗いてゐるのです。二三日は幸福だつたのですが、七時半の鐘ですね、夕方野原かなんかで聽けば敬虔な念に打たれるだろうが眞下では無意味の燥音なのです。だから僕はその時刻になると散歩に出掛けて了つたのです。そのうちドカツと寒くなつたが癖になつて時刻が來ると無意識に帽子を被るやうだつたのです、防寒靴まで穿いて凍づた町をのそのそ歩くなんて愚の樣ですが、何にしても新來の者には何事もめづらしい、ルビー・クヰンなんて薄桃色の包紙の煙草を店先に見付けても嬉しかつたのです。が散歩の範圍は決つてゐて、鐘路以北は『未知の地』だつたのです。ある晩不圖そちらへ行つて見やうと思つたので、オーバに兩手を突込んでぐん〳〵歩いて行つたのですが、地理を知らないので藥種の匂がひどくする横町を廻ると、もう眞闇で見當がつかないのです。地面を透して見るとどうやら土壁が續いてゐる樣でした。白熊の毛皮だの金鎖が美しく陳列してある明るい街から此處へ來ると深い穴に落ちたやうな氣がしました。僕は谷底から攀ぢ登る氣で一心に歩いたのです。そのうちにガラス障子を嵌めた支那料理店の前に出たのです。覗くと靑白い炎をあげて豚肉かなにか燒いてゐる支那人がゐました。あまり寒いので酒を飲まうと這入つたの

花酒

川上喜久子

散る花

山ざくら崩れて散りぬここにしていと華やかに滅びゆく春
哀れなる春の破片とちる花をたなぞこにうけ嘆きけるかな
五人のはらからに似て山ざくら散りわかれゆくこともかなしき
今散るはあきらめし花また散るは怨みたる花さまざまの花
霞とも思へるならん湯のもやのなかに舞ひ來ぬいくひらの花

酒

掌の上の盃を見てわれ言ひぬ醉生夢死のよき友よ酒
酒ならで炎を飲まんさかづきを求むる人と自からを知る
參らする酒の香りのしむ故か心すゞろになりゆけるかな
火の酒に刹那のわれを忘れつゝさてそののちのまたもさびしき
ゆめならばたゞ醒めんのみよしや君われら醉はむと盃をとる

【四〇】

ですが、その男はどうやら活動寫眞で Wu-Fang と云ふ名で、神出鬼沒な業でも演じそうな顏付でした。

其男が激音で怒鳴ると暗い所から、蝙蝠のやうに小輩が飛出して來て私を案内したのです。私はドス黑く脂光りのする椅子に倚つて肉を食つて酒を飲んだのです。急に醉つて兩手をスポンの衣隱に入れて、兩足を突出したまゝうつ〳〵眠つてゐたのです。突然鳥の翼でも叩くやうな音がしたので目が覺めたのです、何の氣なしにの隣部室を覗いたのです。腦髓を一本點したきりですから、黃い月の暈のやうにぼんやりしてゐましたが、冠を被つた男が端座してゐました。立上つては兩手を突出して捧げるやうにしては平伏するのでした。目の前には黑い木像が安置してありました。禮拜が濟むと男は白い鉢を取上げて濃い液體を飲干したのです。此時には醉もすつかり覺めて、私は一心に男の動作を眺めてゐたのです。其男は懷中からなにか出して上に拋げると金粉が一面に飛び散つたのでした。朦朧とした薄闇の裡に金粉が飛ぶのはおとぎ噺の國のやうでしたが、今迄嚴肅な顏してゐた男は栗鼠のやうに敏捷に身を捻ぢりながら金粉を浴びて咽喉を鳴らすのです物凄かつたので、私は勘定を投げ棄てるやうに拂つて、外に飛び出たのです。こんな話は、人生の大道に何の關係はないが、a true story だよ』

Sは笑ひながら云つて煙草に火を點けた。

（一五、五、八、稿）

適用出來んところもあるとかで、此の段々と云ふのが色々の扱ひ上の必要から出たものらしい。

正一位稲荷大明神

鉅鹿曉太郎

『正一位稲荷大明神』、此の位冲眉の熟字はあるまいと思ふ、大明神と云ふ神様が人間の持つべき位階を持つて居るのだから。

支那の何とかの王様が山に登つて歸りがけに俄雨に遭ふた。其の頃はステッキ代用の蝙蝠傘もレーンコートもなかつたと見えて、大きな松の樹の下で雨宿りをした。其松の功績を賞し之に位を授けた

其の時代の松の樹には靈があつて、松籟に和して謝意を表したと云ふのだが之れは餘りあてにならぬ。松には魂はなくとも生命はある。之れを人に見立てゝ位を授け王者の威を示した處は稚氣滿々の中に捨て難い興趣が湧く。

類似の話はまだ澤山あることゝ思ふ。何時の時代かに稲荷大明神の頭に正一位が付いて來た。夫れは恐慌時の株價のやうに急に神格が人格に下落した譯である。併し之れは何も下落を目的としたのではなく、正一位は人間に賜はる最上の位と人間が考へて、敬意の表徵とする積りであつたのだが、結果はヒイキの引き倒しの様なことになつたのである。恐れ多い次第ではないか。此頃或る雜誌に位階勳等のことを面白く書いてあつたが、大石良雄に正四位を贈られると、主人の淺野内匠頭が從五位下であつたのと釣合ひがとれぬと云ふ理由の反討論で、沙汰止みになつたと出て居た。が其の文の筆者は正三位の尾崎行雄を門人に持つ福澤諭吉が正四位では困ると云ふ辭退が、其一門から出たことを書き落して居つた。

人間でも位を貰つて困ることがあるのに稲荷様は嘸々困られたことだらうと思ふ。赤い鳥居のトンネルに遙か手前から謹んで恐縮を申上げたい。

何某の神社に位の様なものをきめて貰ひたいと云ふ詮議が起つた多くの人が集つて鳩首協議と云ふことがあつたそうだが、本士を遙か離れて居ると其の段々がすぐに適用出來んところもあるとかで、此の段々と云ふのが色々の扱ひ上の必要から出たものらしい。

されば吳れい〳〵と云ふのが何となく納まりが悪い。

夫れに御勸請奉る御神體が此の上なき最高の格でも持つて居られたり杯すると、其れ以下の格は付けるに付けられぬヂレンマに陷りはせぬかと云ふ心配がある。

『神體の取り替へをする』杯云ふ大それた記事が新聞に出たりなんかすると、迷惑を感ずるのは神様許りではない。

大石良雄や福澤諭吉は贈位の有無によつて其の眞價に增減はない況んや稲荷大明神をや。爲朝でも『我は鎭西八郎にて可なり』と大見得を切つたぢやないか。

差當り何と云ふ必要もない處に或るものを加へることによつて却て其の本來の目的に反する様な結果を將來せざらんことを神かけて祈りたい。

◈歌人川田氏

平田久雄

◎大阪住友銀行の支配人といふよりも、歌人で知られた川田順氏五月初め滿鮮巡禮の路を、京城にやつて來る。

◎晩春一夜、南山麓に宴を設けて同窓の三矢、草間兩局長、井上大朝子などがしづかに語る。

◎席に美人と高麗の靑磁白磁などが並べられ、いたく主賓を興がらせる。當夜三矢さんの卽興に曰く、

白磁靑磁桃葉民治や春の宵
草間さんも、珍らしく句を拈する
櫻梅桃季共に開くや春の宵

順氏は『桃葉は百葉と書くがいゝ』といひつゝ、御得意の

桃の葉の百葉の千葉の若みどり
つねにもがもな常少女にて

と短册にさら〳〵、井上氏も

桃葉をば百葉にかへて千代八千代少女へなばや常世かはらめ

など、興永く名殘りは、なか〳〵つきなかつたといふ。

◎順氏滯京中の製作二三、

昌德宮秘苑

雉子鳴く赤松ばやし阪あゆみこれの御苑をふかしと思へり

同

睡蓮のともしき花を韓の王の林泉の御池に咲ける今日見る

寂光院

寂光院のうしろに登る道はあれと落椿くろく腐れてゐたり

（一五、五、八、稿）

京城雜筆

刑事被告人となりし思ひ出

山口均四郎

外の室内でも多くはこんな喜悲劇が演ぜられたであらう。仲間の二三と浴室で落合ふたとき、皆目を泣き腫らしながらも口許に微笑を湛へて居るのを見たのである。

僕は後十五六年を經て判事を勤め刑事々件も澤山取扱つて來たが、被告人に保釋を許すとき無罪免訴を言渡すとき、いつも當時の狀況を追想して一種の感慨に打たれたが、今辯護士となつて被告人の爲めに保釋を申請し許可せられ、その結果本人や家族が打連れて事務所を訪問し『全く先生のお蔭で』と狂喜して、シドロモドロの挨拶をなす瞬間、思はず嬉しさにもらい泣きする事も屢々である。蓋し體驗者に非れば味えぬ快感ではあるまいか。

其歳六月末の或日、僕等七名の被告事件は愈々〇〇地方裁判所第二號法廷で開廷さるゝ事に定まり出頭の命令を受取つたのであるが當時の〇〇市の三新聞は、何れも僕等に同情を寄せ、被告人の經歷から性行迄ゝ麗々しく紹介し、犯罪に對する或法律家の意見と稱して『第二の國民をコンナ微罪の爲に葬り去るのは甚だ酷である』など吹聽して呉れたのであるが、市内中學程度の學生からは、日毎に僕等宛に辯込む慰問の手紙や端書が殆んど山を爲す位で、名も知らぬ人々が菓子折や果物籠を運んで來るのも尠くはなかつた、この有樣を見聞した〇〇辯護士は『裁判は世間の同情に左右さるゝものではないが、私共の責任はこれで仲々軍くなりました』と言ふのであつた、併し僕等は百萬の味方を得た樣に思ふと共に世間の同情を衷心から感謝し合つたものだ。

公判の日午前九時少し前に僕等は、オヅ〳〵裁判所に俥で驅け付けたのであるが、傍聽人は構内に蝟集し、白服の學生が其の半數以上を占めて居り、四五名の外國人もあつた樣に思ふ、軈て取締巡査の先導で法廷に立つと、三人の辯護士が白線清き法服姿で出廷する……三人共先年故人になられた……間もなく判檢事書記列席、其後方にも十二三人の官憲傍聽者が着席する、裁判長は型の如く人違ひのない樣に確かめる、檢事が豫審決定書通り犯罪事實を勿體らしく陳述する、裁判長の訊問はドシドシ進行して證據調も終了した後、細い目に近眼鏡を懸けた、搜形の檢事は立上り頗る低聲で何か演說見た樣な事――これが檢事の論告といふものであつた――を言ひ、被告等は皆年少者であるからとの理由で減等し、刑法第何條……當時は舊刑法であつた……かに照し重禁錮一月位から勾留十二日迄位の間で云々と求刑した樣に思ふ。

僕に對しては勾留十二日と言ふた事丈は確かに記憶して居る。僕は此時檢事の顏を仰ぎ見て、成程これが鼻君の所謂赤鬼だなアと感心した……鼻君は常に裁判所では赤鬼が一番恐ろしいとコボして居つた……三人の辯護士は僕等が餘程賢い學生の樣に樂つたいことを述べ立て、聞いて居て嬉しい樣な、悲しい樣な、腹立たしい樣な事を遠慮なく論述する、其中には僕が思つて居つた樣な議論もあつて、辯護士といふ人は誠にエライと思つた、夫は『僕とMとは毎日被害學校の門前を通學するので時々耶蘇の小供をいぢめた事がある、それを怨んで被告等が暴行した樣に全く虛僞の事を申立てたのである其證據には僕が眞先きに、次でMが暴行者として引張り出されて居る』と言ふ一節と『恁な少年學生に刑罰を科した結果は却て惡心を募らせる』と言ふ一節には僕も共鳴せずには居られなかつた、全く僕は在房中鼻君から『坊ちやんが罪に落つれば將來ドウする積だ』と聞かれた時『その時は石川五右衞門の樣に大泥棒になるさと平氣で咎へた位で、又實際さう仕樣と決心して居つたのである、今から思へば無鐵砲の至りだ。

公判の五日後に判決の言渡があつた、八名が八名共、證據不十分で無罪となつた事は勿論であるがその直ぐ前に四十位の男に死刑の言渡があつた、其者が悄然として引きさがつた矢先、僕等の番となつたので、一時は氣味が惡かつたけれども、皆が無罪となつたので流石に嬉しかつたのである、翌日は〇〇市の學生團から寄贈を受けた一坪位の金巾地に『青天白日無罪放免』と八大文字を染め拔いた旗を押し立て黑山の樣な同情者に見送られて、馬車や俥を仕立てい、併し僕等が事件で不在中、其警察は殆んど全部が交迭されたのだと聞いて、成程辯護士が公判廷事件に付いて書くべき多くの材料を持つて居るが、今回はほんの筋道丈を述べて擱筆する積りである

罪放免』と八大文字を染め抜いた旗を押し立て黒山の様な同情者に見送られて、馬車や、俥を仕立て〻郷里に引取つたのであるが、我中學の在る町の波戸場には、先輩同僚、親戚、故舊の面々が、樂隊入りで出迎え、汽船が錨を下ろす前から萬歳〳〵と連呼し、この町全體がヒツクリ返へる樣な大騒ぎを演じたのである、僕等は旗を先頭に、舍監の先導で、樂隊の調子に足並を揃へて、恰も凱旋の將軍の樣な氣持で先づ中學に向つたが町の兩側には黒山の樣な見物人が皆ニコ〳〵して居る、途中僕等を檢擧した警察の前を通過する際には、僕等の後方に從ふ夥多の學生が、殊更らに『靑天白日無罪放免萬歳』と聲を揃へて連呼したので、僕は其時ほど痛快を感じた事はない、併し僕等が事件で不在中、其警察は殆んど全部が交迭されたのだと聞いて、成程辯護士が公判廷で、そんな事を言ふて居つたワイと思ひ當るのであつた、前に『何かの理由』と書いたのが卽ちそれである、學校では校長――排斥校長は責任を感じて辭職し、僕等の信賴した敎頭が校長に任命されて居つた――が僕等に對して訓諭やら、御喜びやらを述べ、年長者たるSが之に答へ、Mの父やOの兄が謝辭を述べ、別室で用意の御馳走を頂戴した後一先づ解散したのであるが、其後檢事が控訴の申立をしたので、七月の中旬に再び○○控訴院で公判が開かれ、其結果も同樣無罪となり、上告期間も無事に濟んで、愈々僕等は靑天白日の身となつたのであつた、僕は此事件に付いて書くべき多くの材料を持つて居るが、今回はほんの筋道丈を述べて擱筆する積りである但八名中の五名は皆秀才で、健康も衆に勝れて居つたのであるが、其五名が五名共……この事件と因果關係はあるまいが……中學時代に夭折して父兄の涙を新たならしめ、僕の樣な貧弱な鈍物が無事に殘つて、あの事件に緣故ある職業に從事して居るのが、洵に不思議だと感ずる點丈は忘れずして玆に附記せねばならぬ。

僕等宛に舞込む慰問の手紙や端書が殆んど山を爲す位で、名も知ら

時は舊刑法であつた……なに時

軍禁錮一月位から勾留十二日迄位

た一坪位の金巾地に『靑天白日無

夏初

東京　玉井小次郎

短夜
人のよの短かくなりしためしとて
女も髮を競いてぞきる

更衣
時くれば更ふる衣はある人の齒に
着るきぬは脫ぐよしもなし

桐の花
住み古りしついぢがくれの桐の花
落ちても高き香の匂ひけり

菖蒲花
花あやめ色とり〴〵に咲き初めて
水の流れも千々にくだくる

新茶
老の坂ふみ入りてこそ若やぎの木
の芽の香り戀しかりけれ

覆盆子
こわたりの珊瑚の玉か草いちご露
にルビーの光添へたる

◇無駄ばなし

平田久雄

◎朝鮮土地の末森さん、『ワシの代りに書けといつたら、廣江がウ、書くといつてゐた、ウント廣江をせめてくれ……』

◎鮮銀飯泉さんのアトは、池川さんが直つてゐる。その池川さん決して朴念人でなく、文藝春秋でも、不同調でもよく讀んでゐる。

◎お醫者仲間の慷慨激越家といへば、岩田末彦（長谷川町）氏に指を屈するが、同氏はモト軍醫で正四位勳三等功四級といふイカメシイ肩書を持つてゐる。

◎京日建築で名を知られた某といふ請負師、以來頭の高いこと無類『紹介狀と持たぬ人には一切面會しません』大臣にでもなつたツモリか。

◎東拓理事は、いよ〳〵鹽北の澤田知事と決定、土地改良部といふのが出來、その下に渡邊得司郎氏が總務課長としておさまる。ところでこの渡邊氏、曾て大連にあつて某新聞に執筆し、行文雄健を以て鳴つた人だといふ。

京城雜筆

伊藤公

足立丈次郎

伊藤公が統監として始めて任に韓國に赴かるゝや、先づ伊勢大廟に參詣せらるゝことゝなり、三重縣知事に電報で知らせて來た。私は當時同縣勸業課長を勤めて居つたが、知事の命に依り早速山田に出張して旅館彼是の世話をした。其頃伊勢の山田では五二館と稱して、株式組織の宏壯な旅館が山の上に在つて、大官や紳士は多く此の館に宿泊せらるゝのが例であつたが、何故か統監の今回の旅館は戸田屋を指定して來て居る。一寸此處で說明を要するが、戸田屋と云ふ內は料理屋兼營の至極粹な家で、料理や道具其他設備萬端行届いて申分はないが、其所在地が山田の新道と稱する遊廓區域內に在つて、統監の御宿としては場所柄が面白くない。知事も眉を顰めて居つたし、私も不思議に思つたのである。

私は山田に出張する際は何時も此五二館が常宿であつたので其時も同館に宿つた。當時此館にお京と云ふ女支配人が居つた。年の頃は三十五六で、美人ではないが極めて怜悧で、氣の利いた行届いた敏腕家であつた。元と此女は名古屋の有名なる秋琴樓の女中頭であつたのを、五二館の重役であつた故奥田正香や伊藤傳七などに愛顧せられ其推選に依り五二館に納つて采配を揮つて居るのである。お京が以前秋琴樓に居つた頃、伊藤公は屢々同樓に宿泊せられ、お京が大の御贔負で萬事のお世話を爲し、或時は京都に或時は奈良にお伴を命ぜられ、細大となくお京でなければならぬと云つたやうな次第であつたとのことである。

私は五二館に宿泊して伊藤公參拜のことから旅館のことをお京に話した處が、お京は大に驚き、御前を新道などに御泊め申すは怪しからぬ事である。平素の御遊覽ならば兎に角、今回は韓國統監の大任を帶びての御參拜であるから、御旅館は五二館にするのが當然である。特に妾が此處に居ることは未だ御前にお知らせしてないので御承知ありませんが、妾が此處に居ながら御前を外の處にお泊め申したとあつては、妾としても濟みません。御前の御氣性は能く〳〵承知して居ますから、御前のお氣に召すやうに取計らひます。決して御心配はいりません、妾が是から一ト走り滄浪閣に行つて是非御前を引張つて參ります。と云つてお京は早速其晩の夜行で大磯へ急行した。

翌朝電報が來て旅館は五二館に變更され、私は此事を知事に知らせるやら何かと準備に忙がしかつたが、其晩お京が歸つて來ての話に、滄浪閣は統監の御立ちと云ふので幾多の大官が別室に控へて居つたのに、お京のみはつか〳〵と公のお居間に通り五二館のことを申上げたら、公は言下に五二館に變更のことを快話せられ大に面目を施したとのことである。聞けば戸田屋は片岡直溫君の贔負の家で同君が戸田屋を指定したとのことであつた。

翌日統監は隨員一同を伴ひ大廟に參拜せられ、山田市中は大に緊張し、知事以下吾々一同も非常に忙しかつた。山田では統監の旅情の幾分を慰むる爲め、同地方の產物を五二館に陳列してあつた。統監は其陳列品を全部購入せよと秘書官に命ぜられた。山田の產物と云つても擬革紙の煙草入やら、袋物類、其他神路山の杉箸等で、眞の參宮土產に過ぎないのを、しかも大きな櫃二個に一ぱいに成るほど澤山に買ひ込まれ。之れを朝鮮に送れとの命令で、吾々は統監が何故にコンナものを朝鮮に持つて行かるゝやを不審に思ひ、秘書官なども不思議に思つて居つた樣である。其後暫く立つて朝鮮から歸つた或要路の人の話に、統監が着任せらるゝや、韓國皇族を始め宮中の人々其他貴族兩班連に、日本の大廟伊勢太神宮所在地の土產物として贈呈せられたので、是等の人々は非常喜び合つたとのことである。公の氣付が人の意表に出で私共も其話を聽きて成程と感心したのであつた。又其際志摩の御木本眞珠養殖場より、眞珠入の金の指輪を小箱に並べて供覽した。處が其晩の五二館に於ける小宴の席に侍し居つた七八名の藝妓に其指輪を統監自ら手に取つて、ソレ貴樣に一ッ貴樣に一ッと投げ與へられ、並び居る妓等は大滿悅して居つた。是などは公の蕭洒恬淡なる

一端を窺ひ知る事が出來ると思ふ少し天機を漏らすの恐はあるが歸らぬと云ふ驚ぎで大賣れつ妓となつたなどの挿話もあつた。

◈煙を吹いて

京城雜筆

一端を窺ひ知る事が出來ると思ふ

少し天機を漏らすの恐はあるが其頃山田に小仙と云ふ藝妓が居つた。藝は格別達者ではなかつたが地方には珍らしい上品な、愛嬌溢るゝ如き美人であつた。お京は此妓を公にお世話しようとしたが、どうしても小仙が承知しなかつたとのことである。此事がどうして漏れたのか新聞に出た。而かも士地の新聞でなく、其頃東京で盛んに賣れて居つた日本新聞に『伊勢山田の小仙伊藤公に肱鐵砲を喰はす』と題して出たのであつた。其後各地の新聞が之を轉載したので小仙は全國的に大評判となり、參宮するものは皆小仙の顔を見ねば歸らぬと云ふ騷ぎで大賣れつ妓となつたなどの挿話もあつた。

公が參拜を終へ山田を出發せられ、汽車中公の直話に今尚忘るゝことの出來ない一語がある『山縣や松方が美術など稱して書畫や骨董集めて樂んで居るが其氣が知れぬ。余は老若男女に限らず人間美を最も愛するものである』と話された。公が常に部下を愛し各々其美を濟さしめられたのは實に公の人間美を愛する天性に出たもので、又公が大政治家として一世に重きをなされた所以も之が爲めであり、公の一生を通じて總ての點に公の此美質がほの見えて居ることを私は感ずるのである。

せられ其推選に依り五二館に納つて采配を揮つて居るのである。お京に、滄浪閣は統監の御立ちと云ふので幾多の大官が別室に控へて居れ、並び居る妓等は大滿悦して居つた。是などは公の蕭洒恬淡なる

鼻と水平

家庭新報社　田村直一

どうです、少しは景氣が直りましたか、イヤまだ相變らずでしてね、何所も同じ秋の夕ぐれと云ふところですかい。まあそんなものです、どうもいけませんねえ。

こんな話は殆ど日常の挨拶の代りに用ひられてゐる。けれども近頃の不景氣は聊か心强くなつて來て居る樣です

それは最初財界の反動來で俄に急流に押流され、或は深みく沈んで所謂四苦八苦の態で、揉みに揉まれ、流れに流れて、近來漸く身體を支へる足溜りが見つけられてゐるではありませんか

が、その足場はまだふら〳〵で、うつかりは出來ません。もう少し固めなくてはと云ふところでせふ。假令へて云へば、今が恰度鼻と口との中間を水平線上に出して、目ばかりパチクリ、大空を望んで早く浮び上らうとする一生懸命の瀬戸際でせふ。

◈煙を吹いて

吉田莊一

○

朝新主催の博覽會、明日（十三日）開會式を擧げる。內容はマダ見ないが、兎に角この大仕事を目論んだ勇氣だけでも敬服に値する

○

伊藤韓堂君、十五日から『朝鮮思想通信』を發行する。なくてならぬものであり、この人ならでは出來ない仕事である。

○

スタンダート石油の木塚さん、今こそ世を隱れてゐるが、我操觚界の先覺であり、名士である。

○

內地で多くの新聞に關係したのみか、今の朝新が朝鮮タイムス時代その創刊者であつたと思ふ。

○

篤學な人で、今は只世にかくれて讀書を唯一の樂みにしてゐる。京城の社會には折々斯うした人物がゐるから頼母しい。

○

內田竹三郎氏から、少し氣焰でもあげやうぢやないか、寄稿家が餘り眞面目過ぎるといつて來た。氏のその檄に曰く

キチョウ面も可ならん、四角四面も可ならん、由來本誌の投稿各位は、乍失禮唯細心、唯謹厚ひたすら控へ目勝のやう見へる勿論正劇……眞劇も必要ならんされど人間時あつてか狂劇、奇劇も亦た一種の延命劑であるのを知らねばならぬと。

○

本阿彌光賀、鎭南浦西崎氏の押入を捜ぐツて、一文字助宗を發見『これで朝鮮に來た甲斐がある』

京城雜筆

創作の素

今村鞆

國民の歴史は攻城野戰の歴史に非ず、眞の歴史は家庭の歴史に在り（ラスキン）

こんな言葉がふと頭に浮んだ。夫れは晩食の直後、煙草を吹かし乍ら、火鉢の側に坐つて、ジッと休息して、家庭の人々が種々雜話を交へて居るのを、默つて聽いて居る時であつた。

實際家庭は社會の縮圖であるから、各人の日々の營みが累積して種々の歴史を作つて行くのであるが、其人々等が雜談の中にも、斷片的に人生の或物のあらはれがある。創作の素として貴重なるヒントをつかみ得る……と斯ふ考へて居た。

一

『エー、自分と同じ年頃の女を見ると、頭から爪先までよく氣を付けて見て居ますが、夫れ丈けに自分の頭は、何時もキチンと綺麗に結つて居ます』

『夫れは何の話しだ？』

『お父さんは御覽になりませんか、氣の變な年頃の娘で、よくあの邊を歩行いて居ます』

『一向見た事がないネー』

『何んでも、内は繼母でかまわぬと云ひます。可愛い奇麗な子ですよ、通行の娘には氣を付けて見て居るが、男の方には振向きもしません。先日も俥屋がカラカツて居ましたが、男は大嫌ひだつて怒つて居ました』

『夫ふ云ふ女を見ると、本人も可愛想だが、其親の身になつて見るとドンナに悲しい事であろふと親心にも同情するネー。又そふ云ふ女をからかふ奴は氣が知れぬ、見付たら撲つてやらふ』

『私しも全くそふ思ひましたよ それからあの子の頭は、あそこの髮結がズーッと前から、只で結ふてやつて居るそふです。感心ですよ。時には二日目に來る事もあるが、厭な貌もせず、あの娘の言ふ通りに、逆はず機嫌よく結つてやるそふです』

『其の女髮結の、やさしき心根には感心した、全く陋巷に隱れたる美談だネ』

こんな會話をして居た。

三

自分の頭の中では、其狂女と云ふものを、完全に描き上げて居た夫れは、京人形の目丈けに魂を入れたよふな姿で、うつとりとした不可解な瞳は、目前の現實とは全く懸け離れた、美しき世界にさまよふて、魂は胡蝶となつて、樂しき夢を追ふて居るであろふ。

其處へ、櫻の花瓣がヒラ〳〵と散つて來る風に其女の振袖が舞ふ美しい生きた詩だ！哀詩だ！

本人は幸福に、詩に生きて居る何時までも其美しき詩の心を失はずに居れ。

コンナ事を考へて、豐國の狂女の錦繪に想到した。紫色の巾を頭に卷き、青竹に短册を付けたのを肩にして居る印象が浮いた。

又廣津柳浪の初期の作に、戀に破れた少女が、夕暮に柳散る小川の土手を、水の流を見つめつゝ、宛て途もなくさまよひ行く樣を書いたのを、少年時代に讀んで何んとなく感傷的になつた時の事に思ひ及ぶ。また、

紐育の或る街の富豪の令孃が、結婚式の當日、相思の仲なる婿君の馬車の來着を待ちあぐみて、三層の窓から晴れ衣裳の首を差延べて、外面道路を見やつて居た、定めの時間を過ぎても婿君の來らざるも理り、御本人は不幸途中に於て馬車が顚覆して、不意の變死を遂げたのである。

此の報を聞いた時に、彼の令孃の血は一時に凝結して、卒倒したが、氣の付いた時は唯カラ〳〵と打笑つて、全く前の意識は失はれて居た。

其後、毎日彼の窓によりて、婿君の來着をまつこと三十幾星霜、の時間を超越して肉體も顏の色も結婚當日の若かさを少しも失はな

を見た時に、忽ちに幻滅を感じた自分の想像で描き上げたものとは

君の來着をまつこと三十幾星霜、の時間を超越して肉體も顏の色も結婚當日の若かさを少しも失はなかつた。誰が目に見ても、二十前後の令孃であつた。此事が醫學上の疑問になつた。

こんな事實も思ひ合せて居た。

四

今度其の本人に出會た時は、仔細に觀察して描寫して見ようと、不幸――主觀的には幸福かも知れぬが――人を題材にすることの、罪を感じつゝも、そふ考へて居た

或る朝早く、散歩に出懸けた時偶然其本人らしきものを、四五十歩の前に認めた……ハハーアあれだナ！……と考へた。本人は電信柱に靠れて、餘り美しくもあらぬ高聲で、何やら譯の判らぬ唄歌を唄つて居た。

近いてハッキリと、其容貌姿態を見た時に、忽ちに幻滅を感じた自分の想像で描き上げたものとは似ても付かぬものであつた。餘りに其異なり方の距離があり過ぎた

此れでは詩にならん。辛ふじて俳句か川柳だ。

迚もモデルにはならん。已むを得ずんば漫畫だ。

創作のスケッチは滅茶〻〻に破れた……、悲慘なる滑稽！。

五

菊池寛の藤十郎の戀、あの創作の種は、實際は茶屋の人妻でなくて仲居である。又憤慨して自殺したでも何んでもなく、笑ひ話で、一寸すねた位ですましたのである。

創作の素と云ふものは手品の種と同じく、大抵は實とにツマラヌものである。夫れに空想のバクテリヤを入れて、醱酵せしめて、灰、吹から大蛇を出すのである。

僕には全く、創作釀造技師たるの資格天分を惠まれて居らぬ。

『頭の事をよく氣にすると見へるネ』

には感心した、全く陋巷に隱れた美談だネ』

て居た。

其後、毎日彼の窓によりて、婿

雜草

鈴木孫彦

雜草で掃かれてゐる
病室へさし込む日永し
晝火事で燃えてゐる
電燈花の蕾の影を踏む
花を散らしに來た風である
木の芽家鴨叱かられてゐる
街路樹となってポプラ芽を吹く
校庭の木の芽に並ばされる（入學）
子雀で杉菜の中に鳴いてゐる
田螺默つて拾はれてゐる
カンバスに塗られてゐる切通しの赭い崖
不肖の子澤山で蠅と居る
筍が縛られて來た繩である
こゝにも筍があるよ
大空鯉幟をたてる
寢た人を乙鳥凝つと見てゐる

◇土俗學の話

平田久雄

京城つれ〻〻草で鳴らしてゐる守屋さん、その專攻は、原始土俗學である▲その土俗學を研究したさに臺灣にも行き、生蠻の中にもまぢつて、生活もして見た▲されば、方位のこと、地氣のこと、天文や動植物のことになると、仲々詳しい▲そんなに流暢な辯ではないがアノ人がぽつり〻〻とこの方面の話をすると、實に興味津々、おぼへず引きつけられてしまふ▲といふと、何んだが蓬頭垢面の學者先生の樣だが、アレで現代政治論も仲々達者なもの。

【四七】

京城雜筆

如是我觀

飯田三郎

室に於て退韓命令に關する眞相を尋ねられ、其日より第三日目に理事官の發せる命令は統監之を取消すとの雅量ある措置によりて我輩等は白日晴天の身となつた、然るに關係官憲たる者より官吏侮辱罪の訴が現はれ其最後の二審に於て松寺局長の干與となり一審の體刑が遂に體刑猶豫で兎が附き關係官憲對我輩等の問題は一段落を告ぐるに至つた、追憶すれば故藤公は遙かに其量宏く亦言論界に對する措置も他と選を異にしたものだ。

○

永樂町人君に嘶した不問語は之れ以外猶多くのことを洩らして居るが其中には波瀾重疊的な複雜した事件もあり、新聞經營に關する苦き體驗談もあつたけれど是等は他日書くことに爲しペンの先を一寸横切らせよう、昔の漢法醫は我々人體の保健を總稱して頭寒足熱の四字で警戒して居る、如何にも保健の元は頭寒足熱でなければ否けまい、然るに今は之を顚動した頭熱足寒的の人間が多くなつて來た、であるから其虚に乘ぜんとするものも現はれて來たのだ、江木法相は『國家機關は人體の臟腑の如く一旦病菌に侵さるゝ時は其禍甚だし』と戒めて國家機關の腐蝕を長歎されて居る、一般人の心さへ堅固ならば何をか恐るべき此時此機頭熱足寒病者の根本的治療を要せずや（五月十一日）

◇日課義太夫

吉田莊一

龍山に大村百藏氏を訪ふと、朝八時といふのに、來客七八名。そして主人公はといふと、日課とあつて約一時間ばかり音吐朗々『太閤記三段目』

題既に平凡である。此平凡な題下に何を書くべきかは見當が附かない、禪三昧の所謂莫妄想を咀嚼し得ざる我輩の事だから書き捨て御免の冒頭で頭の閃めきに任せてペンの先を走らせよう、二三日前松寺法務局長訪問の歸途雜筆社に永樂町人君を繹ねた際、不問語的談話を試みたのであるが、聽き上手の君は合槌を打つて呉れたので電光石火的の揆拶に止めようとした肚裏が滴水の迸るように一語が數十語となり更に數百語に及んだ而かも此娓々たる不問語は滴水の涓涓から淙淙へと移りて洋洋たる大河を構成する樣な首尾完結と言ふのでなく單に我輩の光輝もなき平凡な過去物語に過ぎなかつた。

○

其不問語の動機が何であつたの歟。松寺法務局長訪問に絡まる昔噺が端なくも長くなつたのである法務局長に絡まる昔噺などと言つたなら如何なる經緯があつたのかと思はせるが其絡まり方が單純過ぎる單純だ。寧ろ絡まるの三字を削除するのが穩當である。

○

今より十七年も前のことを繰り返して言ふのが痴人夢を說くの誹を免れないけれど、松寺法務局長の檢察官時代に京城の言論界に攜はつた我輩が筆禍に罹つて同局長の手を煩らはしたことがある、筆禍、それは普通の報道記事の爲ではない『治安妨害の虞れあり』とせられたのであるから我輩の論議其ものが當局の忌諱に觸れたのは玆に註するまでもないことだ、併し此紙上に於て當年の出來事を微より細に亘つて書かずに謎の如く僅かに一端のみを洩して故伊藤公の雅量を示さう。

○

一括して要を摘めば我輩の執筆に係る連日掲載の論議の爲めに我輩首め記者數名が時の理事官の名で向ふ三年間朝鮮に居るなと言ふ命令を下されたものだ、所謂退韓命令なるものである、而かも此命令は『絶對的命令』と稱されて或る短期間内に退韓せねばならなかつた、併しながら日鮮の併合が目睫に迫つた時機に當つて今にも滅滅の運命に臨んで居た理事官の命令が絶對的を意味するのか否かを疑つた我輩は『法を以て命令されたりとは言へ亦法を以て答ふことが全然不可能ではあるまい』と爲し異議の申請に及んで理事官との間に幾交渉を繰り返した。

○

折柄併合に關する樞要な案件を攜へて東上中であつた伊藤統監は急遽歸鮮されたのである、我輩は其れを仁川に迎へて同車歸城亦相從つて統監官邸に至り彼の大鷹接

ある、そうして遺骨を携えて東京へ歸つたのは三月末であつた。北海道へ埋葬しゆくその姿など丑ノ

支那生活者の死

木浦　福田有造

生か死か人は此の問題に常に遭遇して人生の迷路に立つゐる。

死は何時に私等の上にかゝつて來るか豫期することは出來ない回避すべからざる事實だ。

其の思ひ設けぬ友の死に直面して何とも云へない哀愁に閉ざされつゝ、私の畏友M君のことを書いてせめてもの思ひやりをしなければならない私を悲しんでゐる。

M君と私の交りは比較的淺いけれども、お互に氣持のしつくり合つたものであつた。私の心持や氣分をよく理解して呉れる友だつたM君は其の三十才の短い生涯の半ばを支那で送つた、東亞同文書院を出て東奔西走し漸くその事業が緒に就き、惠まれんとしつゝあつた時に突如死が彼の上に襲つて來た、造化の神の戲れはあまりに慘虐であつたので、私はそれを如何に呪つた事であつたろうか。

去秋現在の根據地福州から問題を提げて支那資本家と東上の途、蓬萊丸より無電を寄せて門司で逢ひたいとあつた。然し直に北京へ例の關稅問題に關係ある故に、其の節に朝鮮を通過する故に逢ふべく樂しみにしてゐたけれども、急ぎの旅なれば通過してとう〳〵逢ふ機會を失ひ、北京に直行し、今年に入り關稅會議も捗々しからざる爲めに再度東上の途に逢ふべく樂しみにしてゐた。

其後書信やれども消息なく一月より三月まで推移し、三月九日突如ひとり殘されたる夫人より死の凶報に接し、事のあまりに意外なるに呆然自失、涙もなく書信を見てゐるばかりだつた。

其の友の死はあまり呆氣ないものであつた、私の北京グランドホテル宛の手の返事のないのは當然であつた。

『北京出張中十二月廿五日に知人とスケートをし、轉ぶ時に知人の膝がしらに腹部を打ち、其の爲めの腹痛とも知らず醫者には解らず一日を經てあまり工合惡しく同仁病院長に診察を求むその時は早や手遲れとなり居りし由病人も進んで手術受けると申せしとかにて廿七日に手術、腹部に五ケ所も打ち傷……早や化濃……廿九日自分で死を悟り運命ですと院長に申し、人の命は脆いものだと、友人方の手を握りながら一人で逝きました。

私は夫の職に理解をもたねばとの事に、兎に角十二月歸京、北京より消息を毎日待ち暮しました、あまり突然に夢の樣で御座います、無理にも北京へ私もついて參つたならと返らぬ繰言に私の罪の樣に思はれて……人の命の果敢なきとは聞き居り、承知致し居りながらも斯くまでつれなきとは思ひませんでした……云々

丁度其の時分は支那も動亂で電報も思ふ樣に通ぜず、東京に殘りし夫人の心持は察するにあまりがある、そうして遺骨を携えて東京へ歸つたのは三月末であつた。北海道へ埋葬しゆくその姿など思ひ浮べて、何とも云へない悲痛なる場面ではないか。かくて友のM君の短い生涯は終りを告げるのではないか。果敢ない人生、悲愁を持てる人の身、行末のことなど……

夢ならばさめよと思ひしことの果敢なくも情なきこと……幾多の春秋を殘して年來攻究せし所を傾注して支那開發の爲めに盡瘁せんことを期し、溢るゝばかりの希望と抱負を持ちながら忽焉として北京の旅舍に逝くとはM君の痛恨は如何に……悲愁嗚咽更に禁ずることの出來ないものが幾人あるか分らない。

時は晩春、私は友の心情を思ひ廻らしつゝ咏嘆久しく、悲しや徂く春の落花は亦來ん春には咲けども、萬斛の恨を抱いて逝つた友は如何にして歸り來ることが出來ようか。

呼べども泣けども呼べども人の身の悲しさ如何する事も出來ない

殘れるものゝ悲しみ、うら若い身を異國の修道院へと旅出つた名家の未亡人があつた、身も心も清いホワイトシスターとなる爲めに……これも悲しい人生の過程でなければならない。

運命の飜弄かM君の殘れる人も亦同じ過程を踏んでゆくのではあるまいか、私は人生にこれより悲慘なることがあり得るとは思ひ得ない。

私は徂く春と共に死と生の迷路に立つてゐる人の身を考へつゝ短い生涯で終つた友の上を心ゆくまで追想して『運命です』と云つた最後の言葉を繰返して、せめてもの私の慰安としてゐる。

出來心

片岡喜三郎

その一

地からわき出したやうにヒョッコリと訪ねてきたものがある。見ると白面の一青年で、名刺に書きつけた名前はついぞお目に掛つたことはなさそうだ。だん〳〵聞いて見ると、自分と同郷のものである故を以て何とかして貰ひに來たのだそうである。

『今まで何をしてゐました』

『中學を出てから五年ほど銀行に勤めてゐましたが一寸した事情でやめたのです』

『どんな事情です』

『……』

『女でしくじつたか』

『……』

『酒でも飲みすぎたか』

『……』

『喧嘩でもしたのかね』

『……』

何と尋ねても顔を赤くして首だれてゐるばかりである。つく〳〵樣子をみると誠に内氣な性で、人の前でろく〳〵口もきけぬらしいとても女に好かれそうもなければ道樂をしそうにもない。殊に喧嘩など出來る柄ではなし、何だらうと占ひを立て兼ねてゐると、とう〳〵頭をあげた。

『實は……』

『實は何んです、委しく話して見たらいゝでせう』

『實はその……』

『思ひ切て云つたらどうです』

『實は家内が病氣で……』

『ふん、君細君があるのかい』

『まだ十六ですが、永らく病氣で金に困つたのですが、妻の兄が薄情で一向面倒を見て呉れないものですから』

十六の妻君には少々面喰つたがどうやら見當はつきかけて來た。やつぱり若い男だ、筋書きはお多分にもれぬものらしい。

『自由結婚でもやつたんですね』

『そんなんじやありませんが、兄が一向世話をして呉れんもんですから……』

『それで細君はどうしました』

『妻は廊下に立つてゐます』

『おや、妻君同伴かね、だつて病氣だと云ふじやないか』

『もうよくなつたんです』

青年は何を思つたのか急にニヤ〳〵してゐる。何だか狐に鼻を摘まゝれたやうで要領を得ない。

『それではこれと云ふ事情もないじやないか』

『それがその實は、實は……』

『實は、どうしたんです』

『實は金に困つたものだから、その……』

車は空廻りばかりして一向前進しない。隨分じれつたいものである。

『それで?』

【五〇】

『金に困つたのですから』

『金に困つたから?』

『金に困つたので實はつい…』

『實はつい?』

『銀行の金を……』

『銀行の金、ふうん』

『ついその……』

『よしわかつた。そんなことで朝鮮落ちをやつた譯だな』

『何とかならないものでせうか』

『そうだなあ、それできづはついてないんだね』

『それはまあ諒解して貰つたやうなわけで、全く一時の出來心で、非常に後悔してゐます』

『なるほど』

『何とかならないものでせうか』

『そうだなあ、兎に角細君は廊下では寒いだらう、ストーブの端へよこしたらよからう』

並べて見ると似合ひの夫婦だ。それにしてもこの寒空に、このまゝごとの夫婦のやうな男女が、いくらでも人間の有り餘つてゐるところへ來て『何とかならないものでせうか』には往生せざるを得ない。

『何とか考へて見ようが、あてにはなりませんから』

『どうぞよろしく』

不圖氣がついて見ると、二人とも可なりお腹をすかしてゐる樣子である。巾着の中も云ふだけ野暮な情態である。

『どつか宿るとこがあるのかい』

『金が一文もなくなりましたので……』

『金がなくては困るだらう』

『困ります』

隨分愚問愚答である。こんなことを聞くよりも默つて自分の財布を倒にしておひねりにして差し出す方がどの位氣が利いてゐるか知れない。この際お説教などは何の腹の足しにはなるものじやない。

『じやお借りします』

『細君を大事にせんと、かんね

漫畫を考へる方が餘程辛い……』

と佐あるべきことなり。

綠蔭漫語

秋山忠三郎

新聞記者

世には複雜なる世事人事の渦中に吾れから進んで飛び込み、恰かも吾が事の如く、否な吾が事以上に心痛し苦慮する一種の階級あり新聞記者卽ち是れなり。彼れは一葉の落つるに先立ちて天下の秋を知り、黃鳥の囀づるに先立ちて天下の春を知る。故を以て一の問題湧起せんとするや、恰かも豫言者が地球の亡滅を叫ぶ如く、事重大となし、東に奔り西に走りて其の眞相を探らんことに努め、孜々汲々に日も維れ足らず、人をして餘計なおせっかいな商賣もあるもの哉と感嘆せしむ。されど這は彼等の天職使命にして彼等は之れに依つて生き、之れに依つて立ち、之れに依つて安心立命の地位を得、世人は宜しく彼等の天職使命を尊重し、彼等の地位境遇を諒解するを可とす。併し如何に彼等が世事人事に心痛苦慮すればとて、彼等をして人事相談所又は煩悶引受所の所長たらしむるの適否は豫斷の限りにあらず。

漫畫

近來、東京大阪に於ける比較的大新聞の漫畫が以前（五六年乃至十年）に比して遜色あるかの如く見ふるは遺憾なり。尤も此漫畫程六ケしきものはなく、殊に新聞の漫畫は大低は時事問題の諷刺にて或畫題につき是を是とし非を非とし、黑きを黑きとし白きを白きとして卒直簡明に描くやうにては漫畫にあらず。既に諷刺なり、故を以て虛無神韻の中に其の意を寓し微妙縹緲の裡に其の眞を藏せざるべからず。從つて之れが考案者又は畫家は言ふまでもなく先天的に飄逸怪麗の奇才を有するか、さなくば世間の常識に富み、社會人情の表裏を會得せし、所謂酢いも甘いも嚙み分けしきものたらざるべからず。而も此の漫畫が社會人心に及ぼす影響は偉大なるものにて決して一抹の漫畫として笑つて輕々に附し去るべきに非ず。予の知れる東京の某新聞の主筆にして漫畫の考案者たる某氏は常に嘆聲を漏らし『新聞の論說を書くよりも漫畫を考へる方が餘程辛い……』と左あるべきことならん。

眼に奇山水

眼に天下の奇山水を見、胸に萬卷の書を藏するに非ざれば、未だ以て學者と稱するに足らずとは古人の諺である。しかし今世にあつては學者も分業なるが故に强ち眼に天下の奇山水を見又專門以外胸に萬卷の書を藏するの必要もあるまい。併し鷄の足や鼠の尻尾を研究して蘊奧に達したからといつてオイソレと博士號を與ふるのは大に考へものではあるまいか。文筆經國を以て國家社會に多大の貢獻を爲しつゝあるものにして博士號を授與するに値ひするものは當今大分あるやうである。

◈うわさ雜記

平田久雄

◎飯泉さん、二箇月の內地漫遊を了へ『君、久しぶりに足をのばして來たよ』

◎聞けば何處へ行つても、朝起きると、先づ繪ハガキを買はせ、京城三十何名の友人に、いち〳〵旅行感想をのべる。それが終らぬと朝飯の膳につかぬ。そこで宿屋の女中は、お盆を抱へたまゝアクビを殺してそれの濟むのを待つ。評判の惡いのは當然で『憎らしい吃度若い奧さんを持つてるのよ』

◎京城土木出張所長の本間德雄さん、平壤と船橋里との間に人道橋を作つた人で、人格技術共に立派な人なので、平壤市民から『橋の神樣』と、今以て敬慕されてゐる。たつた一ツのゴ自慢は將棋でこれは有段格。負かしておいて『橋本（豐太郎氏）さん、さていかがでござる』

『實は……』

『實は何んです、委しく話して見たらいゝでせう』

『それで？』

れない。この際お說教などは何の腹の足しにはなるものじやない。

『これはほんの持ち合せだが、これで安宿へでも宿るんだな』

『そんなにして戴いては困ります』

『金がなくて困るよりましだらう、ははあ』

『じやお借りします』

『細君を大事にせんといかんね』

『あり難うございます』

悄々出て行く後姿は薄い。前途長い彼らの人生はどうなるであらうと考へながらまた一つ仕事がふえたやうな氣がした。

偶語

永樂町人

私は日本の料理方に、創才を要請したいと共に、我々の味覺の原人列を去ること、餘り遠くないことを赤面する。

○

ホウレン草をして、ホウレン草として、我々の胃腑に入らしめよ黒鯛をして、黒鯛として、我々の味覺に生きしめよ。

日常我々の食つてるのは、砂糖の塊であつて、一の黒鯛も、一のホウレン草もない。

齒牙と胃腑とが、顓然として早衰する筈である。

○

朝鮮では、出版物の發行權を有つものは、悉く政治家のやうである。

新聞社長、雜誌社長、通信社長悉く世間的に飛揚する。

私はまた、出版者は一の本屋であつて、それは岩波主人、春陽堂主人と共に、世間普通の人間であるとのみ思つてゐた。

發行免許は、即ち政治家免許……そんな理屈になるものか知ら。

○

過去を語る勿れ——といふ言葉がある。

過去に低徊する人間は、上等な人間でないといふ言葉がある。

相當根據のあることであらう。

しかし人間は、ほーつて置いても、前途に目をつけるものである向ふへ〳〵と神經をくばるものである。人間は生れながらにして、自己保全慾があると共に、その一歩前を警戒し、注意し、興味を有つものである。

これは總ての動物に共通する……そしてそれは生存慾に附屬する主要なる一つの作用である。

言ひ得べくんは、人間の尊さはその過ぎこし方を、なつかしむ回顧するところにあるのぢやないか

馬車馬のやうに、前進するのみが人間の價値でもあるまい。

○

いかなる人間でも、子供を愛することを知る。

しかし最もうつくしいのは、その兩親を尊ぶこと——兩親を愛慕した幼時の童純を放棄しないことではあるまいか。

京城雜筆

○

講談を讀むことがある。

面白くて、やめられない。

夜、一時二時に至つて、これはいけないと思つて、卷を擲つことがある。

鼠小僧や、辨天小僧の盜心は我々も同しく有つてゐるのである。盜心といふのがいけなければ、物を盜む道程の興味——それがあらゆる人間にある。我々は、習慣が邪魔して、實行に移ることが出來ない。彼等は、規を超越して、行藏自在に行く。

それを、善しとはいはぬ、しかし非凡の人格であることは間違ない。

○

實行し得ざる多くの群盜が、天馬行空の雄魂を、心のどこかで贊嘆してゐるのが、この講談の實行——或は耽讀ではあるまいか。

○

砂糖の味の單純さは、赤といふ色彩の味の單純さと、丁度同じやうなものではあるまいか。

赤は以て蠻女の心を引き得るであらう。砂糖は以て小兒の舌を魅了し得るであらう。しかし味覺と視覺とが、或程度の進展をしたものには、この二つの無含蓄には、到底長くたへることが出來ない。

飜つて、日本の料理を見ると、その總てが砂糖と味噌の味である

魚介、蔬菜總て砂糖の味でだまして咽喉を通さうとするのである

◈いろ〳〵帖

吉田莊一

◎五月といふ月が來ると、モウ朝鮮土地の末森さんが、白い扇子をバタ〳〵『君、暑うないかね』

◎その末森さん、二階に事務室があるが、いつも階下で仕事してゐる『二階の方が涼しいでせう』といふと『イヤ二階に一人ゐるのは、何んだか無氣味でね』『なぜですか』『だつて、腦充血でも起して見たまへ、誰も知らないうちに參つてしまふ』『ソレなら事務附の女事務員をドウです』末森さん、プッと吹き出して『ハッハ君はなか〳〵智者だね』

◎東拓の松本光さん、文章もテキパキしてゐるが、執務振りも頗る明快。好きなのは何より酒、この方は支店隨一といふ評がある。

◎同氏と、向ひ合つて川上十郎氏、氏は將棋をやる。或日の閑談に曰く『アノ山岸天祐堂の主人は強いらしいよ、だつて小僧を相手にして、帳簿を檢査しつゝ指してゐる。アンナ藝當は仲々出來ない』『ソレは蓋し相手の方が弱いんでせう』……川上さん、腹を抱へて『アハハなるほど』

魚介、蔬菜総て砂糖の味でだまして咽喉を通さうとするのである

主要なる一つの作用である。

言ひ得べくんは、人間の尊さは

んでせう』……心上さんへて『アハハなるほど』

京城雜筆

編輯後記

一記者

◎購讀者が殖えて來たので、增刷を斷行すると共に、無代誌を思ひ切つて整理することにした。

◎五月號限り雜誌が行かなかつたら、それは整理した結果だとお察しを願ひたい。貰ふ方は、たつた一部でも出す方は何百部といふ數にのぼる。いつまでもズル〳〵にヤリ來りを墨守する譯には行かない。

◎近來〆切りも、早くなつて來た。大低十二日に最後の稿をうけ十六日にはスツカリ印刷部へまはす、まはしてしまへば、棉入をぬいだやうな氣輕さを感ずる。

◎ことにうれしいのは、御依頼以外の稿が、どうしても十二三篇は着くことである。斯うまでして御後援して下さると思へば、涙ぐましい氣になる。

◎大阪朝日の下村宏博士が、卷頭の『虫のゐどころ』を御執筆下すつたのは、非常の光榮と思つてゐる。

◎福岡の市長さん、とう〳〵雄篇『朝鮮を去りて』を送り來る。健康もいゝし例に依つて市民間の氣うけも頗るいゝらしい。

◎中島司さん來る、但し非常に多忙で、ろく〳〵話る隙はない、殊に廣江氏不在で、御本人も不本意だつたらうと思ふ。

◎『隙があるから、これから大に書くよ』と、飯泉さんはいつてくれる。この機會に、自叙傳はどうでせうか。

◎東京の岸さん、行つた切り梨の礫……健康如何と心配させる。

雜筆と寄稿

一、原稿は毎月十日締切ます。

一、しかし成るべく五日頃までに頂いた方が好都合です。

一、出來るなら一頁以内にお書き下さい。

一、御名前を出すことの出來ぬ原稿は、お載せいたし兼ねます。

一、お願ひした時は、どうか努めて御執筆下さい。お願せずとも、お心つきのことはどうかお書き下さい。

一、雜筆は事實上寄稿家及び讀者の共有物であります。

見聞抄

川田順

法隆寺泣佛

頭抑へ悶え泣する佛あれば大聲あげて泣く佛あり
斑鳩の泣佛たち泣き悶えこらゑかねたるその聲きこゆ

宮津行

橋立の江尻の村は海越しに見らく遠けど朝煙みゆ
さしいでの長洲の岸の草のなかに舟より見ゆる赤百合の花

紀州行船中

み熊野の日の岬をし越ゆるほど少し搖りたれこの夜らのよさ
わたつみの沖くろ〳〵と盛り上り夜空の雲のはてなき哉や

公園の夏

ほのかなるベンチの人の煙草の火大藤棚の蔭の暗きに
公園の入口にある病院の夾竹桃も咲きにけるかな
水際に立ちて眠れる水鳥の赤き脛こそなまめかしけれ

細工の御用は本町徳力へ
電本三九三九
京城 徳
金銀白金
地金ノ御用ハ
京城明治町
徳力本店出張所
電本二〇八八
一五七二

大正十五年五月廿八日印刷
大正十五年六月一日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼編輯人 松本武正
印刷人 石川利夫
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六

松本武正
加藤儉吉 共著

金剛山探勝案内

（特價 金一圓也）

發行所 龜屋
お取次 京城雜筆社

鈴木商店

京城支店

樂器と蓄音器

獨乙高級ピアノ
山葉ピアノ、オルガン
鈴木製
ヴアイオリン、マンドリン
獨乙製
ウアイオリン、マンドリン
内外管樂器一切
内外蓄音器
内外レコード（日蓄、日東、内外ウインナー）
内外音樂書
樂器附屬品一切
運動具一式
（目錄無料進呈）

京城本町二丁目二十九

釘本洋樂器店

電話一二八三番

社會式株業工氣電河古

所張出城京

(四八町川谷長府城京)

(九八五局本話電)

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競爭をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用
陸軍御成病院御用
京城府內各病院御用

平山牧場

電話光化門一三三番
京城東小門外

初夏の御用意は

三越へ……

プラタナスの木蔭に涼を趁ふ頃、
初夏のうすものに映える新しい品品
が取揃ひました。何卒、博覽會のお
歸りには是非御立寄り下さいませ

◈六月の三越◈

夏物見切大賣出し（一日より三階にて）

土曜・日曜夜間營業、午後十時迄

三越呉服店

京城本町

京城雜筆（第八十八號）

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年六月一日發行（毎月一回一日發行）